第５章

ＡＬネットワーク連携機関からの報告

子どもたちは「協働」し，「自走」する。

連携校　愛媛県立三崎高等学校

AL ネットワークの取組に参画させていただき，早くも３年が経ちました。県内外，あるいは国外の生徒たちと「混ざる」ことによる教育効果の大きさは，いつも私たちの予想を大きく超えてきます。

まずは，「全国高校生 SR サミット FOCUS」での生徒たちの成長についてです。本校は第１回の SR サミットから参加させていただいており，FOCUS を経験した生徒たちがその後の三崎高校での探究活動の中心になってくれることから，私自身も非常に楽しみにしているフォーラムの一つです。今年は，２年生１名と１年生１名のハイブリッドチームで参加させていただきました。特に２年生で参加した生徒は，昨年度の FOCUS にも参加しており，「どうしてももう一度参加したい！」という思いで１年生のパートナーを連れて参加してくれました。プロジェクトを立てるところからオンラインミーティングのスケジューリングに至るまで，私たち教員の手を借りることなく，２年生の生徒を中心に全日程を終えることができました。昨年度の FOCUS 参加以降に本校で起こったオンライン探究の流れが確実に生徒たちの中に定着し，その「新しい当たり前」が先輩から後輩に引き継がれていることに強く感動しました。

２つ目は，本校としては初めての参加となった「MUN 模擬国連」での生徒たちの挫折と成長です。本校からは２年生４名の女子生徒が参加しました。英語力もそれほど高いとは言えず，海外経験もほとんどない４人にとっては大きなチャレンジでした。画面の向こうの相手の発言が聞き取れず，また，ある生徒は準備してきたものをことごとく否定されてしまい，事前研修の段階から全員が号泣するという最高のスタートでした。四国最西端，全校生徒 100 名あまりの学校で学んできた４人の生徒たちにとっては，「言葉が通じない」「自分の意見を否定される」等はかなりショッキングな出来事だったのでしょう。しかし，彼女たちは自分たちのやってきたことを信じ，人の倍以上の準備をして本番に臨みました。そして，本番の議会の場では

積極的に意見を主張しながら食らいついていく姿を見せてくれました。全日程終了後にある生徒が「わからないことをわからないと言える勇気が持てました！」と笑顔で伝えてくれたことがとても印象的でした。その後，MUN を終えた生徒たちはそれぞれの探究班の中でもリーダーシップを発揮し，その学びを他の生徒たちに還元してくれています。

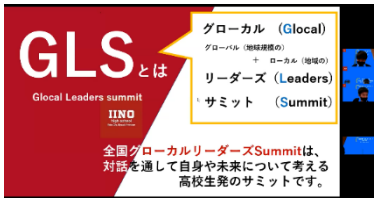
その他にも「Global Youth Fair～SURVIVE!～」や「フィリピン・オンライン・スタディツアー」など，様々なイベントや研修に参加させていただきました。どれも校内で参加者の選考が行われる程の人気なものばかりでした。これまでは我々教員側から生徒たちに上記のようなイベントの案内をしていたところが，今年は先輩から後輩へ「FOCUS 面白いから参加してみない？」や「立宇治の研修は絶対参加した方がいいよ！」と言った形で広がり，生徒の中でも AL ネットワークが出来上がりつつあることを感じました。

混ざり合うこと，それは本校がコンセプトとしている「協働」に近いのかなと思います。県内外・国内外の学生たちと混ざり合い，協働した成果はそれぞれの「自走心」につながると強く思わせてもらった一年でした。

（三崎高校　地域協働課　河野　雄太）

全国グローカルリーダーズ summit を開催

連携校　宮崎県立飯野高等学校



今年度も２月１０日（木）～１２日（金）の日程で開催した。これは,「グローカル」な視点で活動する高校生，大学生，高校教諭，行政職員，民間企業，NPO など様々なカテゴリーの方が一堂に会し越境的な学び合いの場をつくることで，次代に向けた新たなチャレンジを創出するイベントを開催したいと生徒の発案で始まったものである。企画・運営もすべて飯野高生が行っており，今年度はオンラインながら３日間で全国から約８０名の参加があった。日本は他国に比べて高校生の自己肯定感が低いといわれる。それは，高校生がさまざまな制限の中で生活していて気づかないうちに，自分の可能性に蓋をしてしまっているのではないか。この問いから，全国の学生や社会人などが一堂に会し対話する場をつくり自らの新たな可能性を広げていく対話をメインとした内容になっている。今回は「自分って何？」をテーマに探るもので参加者が数グループに分かれて日常生活ではほとんど語ることのない「自分」について考え，初対面の高校生や大人と語り合う２日間となった。また，この対話はワールドカフェ形式で運営されていてアウトプットする内容を参加者全員が受け入れることが前提でもあるので，参加者は心理的安全性が担保されている環境で自分の考えや思いを他者に伝え，他者の視点を知る貴重な機会になったようである。また，参加した高校生が取り組むプロジェクトの事例発表もあり，それぞれの視点から取り組むプロジェクトは大変好評であった。今回も開催自体が生徒たちのチャレンジであり，ＡＬネットワークの内外から多くの方に参加いただけたことは今後につながる素晴らしい機会となったと考えている。

【参加者の所属校，所属団体】
茨城県立那珂湊高等学校，岡山県教育庁，福岡県立須恵高等学校，熊本県立御船高校静岡県立天竜高等学校，岡山教育事務所，HAMADA 教育魅力化コンソーシアム，福岡県立小倉商業高等学校，宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校，荒井学園新川高等学校，新潟青陵高等学校，長野県長野工業高等学校，北陸大谷学園小松大谷高等学校，中村中学校・高等学校，熊本県立南稜高等学校，広島県立大崎海星高等学校，北海道教育大学釧路校，チーム SATOYAMAHA，大阪府立豊中高校能勢分校，公文教育研究会，一般財団法人つわの学びみらい，大正大学，えびの市議会，栃木県立足利特別支援学校，えびの里山の会

（指導教諭　梅北瑞輝）

全国高校生 SR サミット　ＦＯＣＵＳに参加しました。

連携校　東明館高等学校

ＡＬネットワークの取り組みの１つ，全国高校生ＳＲサミット（FOCUS）に参加しました。前回に引き続き，今回も参加校の多さに圧倒されました。様々な地域の学校の生徒が参加されたことによって，各々の文化を学ぶことができただけでなく，初めてのプロジェクトで学びの多い期間となりました。特に素晴らしかったのは，生徒だけでの司会進行で，回線などのトラブルがあったとしても，対応できるような事前のシミュレーション力とコミュニケーション力をもち，瞬時に対応されていたことに感銘を受けました。今回参加させていただいた本校の生徒は，初めての大きなプロジェクトへの参加だったため，どのように動けばいいかわからないまま，自分たちで模索して動いていました。その過程で活動のスケジューリングやプレゼンテーションの方法などのスキルアップが見られたことがとても嬉しく思いました。もともと，映像制作にたけている生徒はいたのですが，自分が作成した映像がどのように掲載され，どのように影響を与えるか，ということを考えるようになりました。その後の活動に大きな影響があり，行動力や学んだ知識の活用力が伸び，自分達でプロジェクトを走らせることができるようになりました。また，他校との交流の仕方，特にオンライン自体もあまりやったことがなかったため，難しい部分もありました。そのため，最初の FOCUS では，オンラインでのやりとりにかなり抵抗がありましたが，他のオンラインイベントも経て，さらに AFTER FOCUS で新しい取り組みに参加することで，コミュニケーションの取り方の幅が広がりました。

WWL の AL ネットワークは常に，新しい可能性を考え，生徒が主体的にさまざまなイベントを運営し，教育の平等を実現してくださり，ありがとうございます。日本中の学校が共に学び，考え交流をすることが今最も必要だと感じます。そういった学びの場を作っていくことができたらきっと未来を生き抜く人財が生まれていくと思います。本当にありがとうございました。

FOCUS での写真およびプレゼン資料などを載せています。

（探究コース主任　山元祐輝・担当　長岡　潤）

WWL 長崎フォーラムを開催しました！

連携校　長崎東中学校・高等学校

令和３年７月５日（月）これまで努力してきた高校３年生の課題研究の最終発表として，ＷＷＬ長崎フォーラムを開催しました。拠点校である本校に加えて，連携校の長崎西高校，長崎南高校，大村高校，壱岐高校，対馬高校，広島女学院高校，立命館宇治高校，三島北高校が参加しました。本校視聴覚教室での発表，リモートによるライブ発表，事前に録画した発表動画の配信といったハイブリッド方式による研究発表と，代表生徒によるパネルディスカッションが実施されました。

長崎東高校の篠崎義史さんと八木あかりさんが，長崎西高校，長崎南高校，壱岐高校（オンライン），対馬高校（オンライン）の代表生徒とともに，パネリストとして登壇しました。金巻凜さんがファシリテーターを務め，「課題研究（探究学習）で身についた力」や「将来伸ばしたい力」等について討論しました。忍耐力やコミュニケーション力が養われ，他者と協働する力や物事を多角的に見る力が今後も必要との内容でした。

★スライド発表部門

優秀賞	日本語	長崎東	海洋プラスチック削減に向けて （石橋泰志，上戸大希，冨地蒼太，平山瑞季， 小田原真凜，森田景舜，野本美冬）
優秀賞	英語	長崎東	感染症予防ハンドケア用品の開発 （橋爪凜，岡李奈，楠本碧）
優秀賞	日本語	大村	デンプンによってアイスは溶けにくくなるのか！？
優秀賞	日本語	立命館宇治	PC1台で無限の可能性～study abroad revolution～
優秀賞	日本語	壱岐	IKIIKIな冬！！～島ヒュッゲ～
優秀賞	日本語	広島女学院	新型コロナウイルス感染拡大による視覚・ 聴覚障がい者への影響に関する研究
優秀賞	日本語	長崎南	遅れが発生しにくい路線バス運行経路の検討

★ポスター発表部門

優秀賞	日本語	長崎東	高校生が考える認知症予防 （寺﨑健大，田坂颯汰，山下稀星，永田栞理）
優秀賞	英語	長崎東	ケニアの特産品でマラリアは予防できるのか （田端みのり，山口琉空，木寺郁人，天野智佳子 黒木遥人）
優秀賞	日本語	長崎西	迷路実験によるデグーの記号認識能力の検証
優秀賞	英語	三島北	三島駅北口の緑化計画

立命館宇治高校主催　Global Youth Fair ″SURVIVE!″に参加して

連携校　長崎東中学校・高等学校

参加生徒感想文

長崎県立長崎東高等学校
３年　Ｒ．Ｏ．
SURVIVE！に参加して，海外の人と交流することができ，とても楽しかったです。今までこのように海外の人と話す機会はあまりありませんでしたが，このような経験ができ，日本だけでなくいろいろな国の状況や社会問題などをたくさん学ぶことができてよかったです。特にカンボジアやフィリピンにおける子どもの栄養不足や児童労働の問題について深く考えることができました。運営のみなさんありがとうございました。

長崎県立長崎東高等学校
３年　Ａ．Ｙ．
私自身，食糧問題についての取組を本格的にすることははじめてで，知識も十分にない状態での参加で不安もありましたが，この問題について多くのことを学びたくさんの気づきを得ることができました。これから先この世界を守っていく世代としてさらなる一歩が踏み出せたと実感しています。他の参加者もみなフレンドリーで，シンガポールやフィリピンからの参加者とも英語で交流できたことも楽しかったです。貴重な体験になりました！

AL ネットワークに参加して

連携校　宮崎県立宮崎大宮高等学校

AL ネットワークに参加させていただき３年目となりました。AL ネットワークへの参加に関わり， AL ネットワークのプログラムに参加した生徒の変容と本行の取り組みの２点について報告させていただきます。

１　今年度参加した AL ネットワークのプログラム

（１）FOCUS

今年度初めて１年生２チーム８名が参加させていただきました。他校生と混ざってプロジェクトをつくっていく過程の中で，地元宮崎では味わうことができない多様な価値観に出会うことができました。活動を通しての学びが多く，参加した生徒には非常に刺激的な経験となりました。

（２）2021 Ritsumeikan Uji MUN

２年生１チーム２名が参加さていただきました。3 年目の参加でしたが，これまでと同様に学びを深めることができたようです。本年度は英語活用能力よりも「模擬国連で扱った国際問題はそれぞれ別々に生じているのではなく，その原因は似ているので問題の根本的な解決が求められることがわかった」，「条項を他国とひとつにまとめる際に妥協するのではなく，互いが納得した状態を目指すのが大切だということがわかった」と述べるなど, MUN の活動内容そのものからの学びが多く語られていました。MUN そのものが様々な背景や英語活用能力の生徒たちでも充実した活動ができるように整備され，成熟してきていると実感いたしました。

（３）GYF SURVIVE ! 2021-2022

今年度初めて２年生２名が参加さていただきました。まず，企画から運営まで立命館宇治高等学校の生徒さんが担当されている様子に驚きました。1 年次から WWL に関わるプログラムで経験を積み上げてきたことをもとに，スキルももちろんですが，課題に向かう真摯な姿勢や行動力および他者との協働を重視する姿に，真にグローバルリーダーとしてのマインド，資質が身につけられていると感じました。彼ら主導の下，テーマについて国内外の高校生たちと向かい合った時間は，参加生徒にとって濃密であり，心が揺さぶられたようです。「はじめて会った人でも自ら話を進め，対話しようとし，さらにリーダーシップをとろうとする。そんな海外の同世代の子供たちに圧倒させられました。」「みんなが『他人事』ではなく『自分事』としてとらえ，それを熱意をもって伝えようとする姿に感銘を受けました。」協働を通しての学びは深く刻まれ，生徒の未来に影響を与えていくようです。「『知らない』ということが，飢餓や紛争の現状にある人たちをさらに苦しめることになるということ。逆に言えば，世の中の一員として『知る』ことが名もなき私たちにできる最低限のことであると改めて学びました。」「参加したことで，私の将来のビジョンに新たな目標が加えられて‥（中略）‥感謝の気持ちでいっぱいです。」ここまで生徒に影響を与えたプログラムは

記憶にありません。同じ世代の生徒が企画し，集まって真剣に考える，行動したからこそであると考えています。

（4）フィリピン・オンライン・スタディーツアー2021

今年度初めて 1 年生 2 名が参加さていただきました。他のプログラム同様に他校の同世代の生徒と班に分かれて，フィリピンの現地の現状を映像だけでなく現地の方とのオンラインによる交流および意見交換を経て，学びを深めていく内容で，参加した生徒が交流を楽しむことでフィリピンの人たちの心を寄せた上で課題に向き合えていたようです。2 人とも「楽しかった」が第一声であり，かつ取り組んできた課題に対しても学びを深めたと話してくれました。自然に「自分事」に近づけることができたのが印象的でした。

2　本校（宮崎大宮高等学校）の取り組み

（1）海外との共同研究

7 年前 SGH 指定時より，ベトナム，台湾およびシンガポールの学校と交流や協働活動を続けています。これらの関わりの中からより充実した協働を実現しようとする環境が生まれ，ついに本校文科情報科 2 年生とこれらの学校の生徒との共同研究を本年度実施するに至りました。オンラインという制限はありましたが，それぞれ自分たちにあった協働をつくりあげて，約 1 年間にわたって研究を進めました。このことを通して，互いに発見，学びがあることはもちろん，最も大きな成果は互いをより身近な存在として認識し，様々な協働が自然にとれるようになった手応えを得ることができています。

（2）ウィンターサイエンスプログラム

「水の浄化」をテーマに，宮崎県内 2 校，立命館宇治中学校・高等学校，さらに海外連携校 3 校の生徒が参加して実施しました。11 月に噴火による水汚染と地域生活への影響，そしてその浄化について現地から中継を交えて学び，その後各学校のチームごとに限られた条件下での水浄化の実験計画を立案した上で，2 月に実験を一斉にオンラインで結びながら同時に行い，その成果を共有し，意見を交換しました。国内外の生徒が同じ場所にいなくても，オンラインでお互いの活動が見える状態で，同時に実験（アクション）を起こすことで，その後の議論が今までになく深まるのを実感しました。

オンライン同時実験

（3）大学教育先取り履修

地元の宮崎大学農学部との協働で，大学生向け講義をオンデマンドで夏休みを利用して高校生が受講することを実施しました。参加生徒の約 8 割が受講を完了し，その成績も想定より高いものになりました。あらためて，学術的に高校を超えた分野について学べる機会を設けることの意義を実感することができました。今後は，科目数を増やすと共に，大学での単位認定の実現を目指して取り組んでいきます。

AL ネットワークでのつながりは，このような本校の挑戦の原動力の一つとなっております。生徒も大人も混じる，そこから共に学ぶ。これからも続けていくべきと改めて強く感じました。

第４回全国高校生 SR サミット FOCUS に参加

連携校　名城大学附属高等学校

講師の方々の講義

立命館宇治中等・高等学校主催の第４回全国高校生 SR サミット FOCUS に本校の生徒 3 グループ，7 名が参加しました。7 月 10 日より予定されていたリーダー合宿もオンラインでの開催となりましたが，最終発表日の 7 月 31 日・8 月 1 日まで，生徒たちはオンラインによる講義や課題に対して Slack を活用しながら話し合い，それぞれの探究課題におけるこれまで気付かなかった問題点や，発展性について考えることができたようです。参加生徒からは「FOUCUS で自分のグループに入ってくれた生徒からの意見によって，今までとは違った目線で自分たちのプロジェクトを見直すことができました。」「今後の探究活動にもいかせるような貴重な経験ができました。」などの声が聞かれ，他校生徒との協働作業を通して自身の研究を進めるヒントを得たようです。

当日発表の様子

また，発表に関しては「初めてのオンラインとはいえ，多くの人の前で自分たちのプロジェクトを発表でき，とてもいい経験ができました！」という声が聞かれました。コロナ禍で減ってしまった発表の機会をオンラインという形で提供していただけたことが，彼らにとって大変貴重な経験になりました。

同時通訳による全体交流の様子

さらに，学校間における対面式の交流が少なくなる中，その場限りの交流発表ではなく，大会後も多方面の人と関わり続けられるプラットフォームを用意していただけたことが，新たな人間関係を築く機会になった生徒も見受けられました。生徒からは，「最初は全く知らない人達とプロジェクトを進めていくという事に不安と強い緊張がありましたが，実際にやってみると思っていた程大変な事も少なく，全く違う環境で育った人が集まっているからこそ，学ぶことも多くあって，凄く良い刺激になりました。FOCUS が終わっても，交流が続けられるのもすごく良く，参加して本当に良い経験になりました。」という声が聞かれ，Slack という SNS ツールが FOCUS，AFTER FOCUS においても，それぞれの交流を促進する素晴らしいツールとして活かされていたのではないかと考えます。AFTER FOCUS では，それぞれの探究活動の進捗状況を発表するにあたり“oVoice”を活用するなど，より幅広い研究発表を新しい形で観ることが可能になり，今後発展していくであろうオンラインによる発表の場に慣れると言う点でも，生徒とって理解を深める素晴らしい機会になりました。

オンラインラオス海外研修に参加

連携校　名城大学附属高等学校

本年度も，本校の生徒１名がオンラインによるラオス海外研修に参加しました。１月８日より５日間に渡りオンラインにてラオス語学び，市場を見学し，同世代の学生と交流するなど，多くの機会を生徒に与えていただきました。生徒も，具体的なラオスの生活を体感するかのように，ライブ映像でのモール見学，市場見学をさせていただいたことで，映像から文化や生活の違いを垣間見ることができたようです。

参加生徒からは,「今年のラオスオンライン研修では，去年はなかった，ラオスの大型ショッピングモールのコロナ禍の状況を見学させていただけたのが最も記憶に残っています。理由としてはラオスのショッピングモールでも北海道の牛肉や日本茶などが売られていてとても嬉しい気持ちにもなったからです。」という声があり，日本とラオスとの繋がりについても学びを深めたようです。

ショッピングモールの様子

コーヒー農家の方からのお話

さらに，「オンラインというかたちにはなりますが，フェアトレードのコーヒーショップやコーヒー農園，市場なども見学させていただいて，日本との文化の違いや気候に応じた食べ物，ラオスの方々の習慣などが学べてよい経験になりました。」という声からは，この海外研修が，伝統文化理解や広義の異文化理解ではなく，人々の実際の暮らしの中にある習慣，小さな文化の違いを発見することができた，貴重な経験になったことが分かります。

この生徒は昨年も参加し，その経験から今年も是非参加したいと申し出てきた生徒です。現状では，実際に海外研修へ行くことは難しいですが，オンラインという道ができたことで，このように他校からでも毎年興味を深めながら参加することができています。この WWL ネットワークがあることで海外に触れる機会が増えていることに，心から感謝いたします。

フェアトレードコーヒーショップ

Succeed を考える

連携校　学校法人市川学園市川高等学校

WWL 連携校となり，SR サミットに参加して 3 年。今年度は 1/22(土)に開催された WWL 研究発表会で立命館宇治高校への訪問が叶い，登壇の機会をいただきました。3 年間の活動を振り返る機会を得て，改めて WWL 事業に参加した生徒たちの成長を実感しています。

FOCUS は探究テーマを自分たちで決めてグループを作ることから参加が始まります。「自分事」に取り組む生徒は，普段の授業以上に前のめりで，知ること，アイデアを出すこと，校外に向けて発信することを，初めて経験する生徒も多くいました。同世代の日本全国の学生と交流して意見し合い，校外を知って自分に還元し，リーダー研修や FOCUSWEEK では世界の取り組みを知って，SDGs についての知識を深めました。そして，連携企業を始めとする社会人の先輩にいい刺激を得ることができました。また，同じチームのメンバー同士で強みを生かしあうことができたチームビルディングの経験も，生徒にとっては大きな糧となっています。

今年は FOCUS　リーダー合宿関東地区での司会を経験しました。自分たちで運営するという初めての経験を通じて，また，立命館宇治高校のみなさんの姿を準備段階から見ることで，多くの刺激を受けていました。生徒の多くは「運営の楽しさ」をこれからも続けていきたいと校内外での活動を積極的に続けています。この行動の変化も，自分事にできたことのひとつです。

WWL 研究発表会での，藤原さと氏「探究の学びの到達点とこれから」，芦田加奈氏の High Tech High についてのご講演も，非常に心に残りました。一人ひとりが自分の得意を生かして協働する探究の時間を，授業や課外活動でこれからも作ることが必要だと痛感しました。

研究発表会でも宣伝させていただいた，2022 年 3 月に 5 回目を迎える「市川アカデミックデイ」では，生徒それぞれの学びや体験を発表し，他の生徒と共有するインターアクト形式の発表を行っています。市川中・高では多くの生徒たちが研修や各種コンテストに参加するなかで，自分で決めたテーマを突き詰めています。FOCUS での学びを発表するという良い流れも続いています。次年度も開催予定ですので，多くの連携校の関係者の皆様にお越しいただければ幸いです。

WWL 活動についての報告書

連携校　青翔開智中学校・高等学校

連携校として３年間活動させていただき，本校からは約 30 名の生徒が様々な活動に参加しました。参加生徒は課題解決に向け，悩みながらも，決して自校のみだけでは得ることのできない貴重な体験をし，大きく成長しました。本報告書では３年間の活動において得た成果と課題を報告いたします。

成果の１点目は，生徒・教員ともにつながりの幅が広がったことです。FOCUS を中心に，各活動において協働して過ごした日々は高校生にとって大きな意味を持ち，活動終了後も連絡を取り合う姿を数多く目にしました。また，社会に貢献する同世代の活躍に刺激を受け，自身でプロジェクトを立ち上げる生徒も多く，その際は各活動で構築したネットワークを有効に使い，相互で支え合う姿が多く見られました。これは教員間にも当てはまり，プロジェクト活動や探究活動をはじめとし，人的交流や情報交換が頻繁に行われ，各校の生徒に多くのチャンスを還元することができました。

今年度の FOCUS 持ち込みプロジェクト

（スライド一例）

成果の２点目は探究活動の実践の場としての活用です。本校では中高６年間通して探究活動を行っています。課題解決に関する知識やノウハウが蓄積されていく一方，実際にそのような力を学校外で使う機会はあまり多くなく，自分にどのような力が付いているのか，今ひとつ自信を持てていない様子がありました。しかし，WWL の活動ではいつもと違う仲間たちと，いつもと違う場所で，課題解決に取り組んできました。そのような実践の場では「意外と自分はアイデアが出せる」「意見の集約ができる」といった探究活動で身につけた力に実感を持つことができ，その上で新たな自身の課題と向き合うきっかけとなりました。

WWL 活動の課題としては発信力が上げられます。WWL の各活動では，「同世代を混ぜ合わせ活動をする」「民間の事業者と共に活動を作り上げる」など，有効性は高いものの学校現場では一般的にはなっていない活動が多くありました。実際にそれらの活動に関わり，生徒を通して伝わってくる活動の成果の大きさ・意義を，WWL ネットワーク外にどれだけ伝えていけたかは，まだまだ改善の余地があるように感じています。高校生が持ち込むプロジェクトもとても素晴らしいものが多く，WWL としてより発信力をつけることができれば，今よりも多くの方に注目していただくことができ，行政や事業者といった関連機関につなぐチャンスを創出することもできます。

以上が，WWL 活動３年間における成果と課題になります。

WWL 連携と GL コース探究プログラム F.GLEP2021

～国家戦略特区 FUKUOKA から羽ばたく女性グローバル・リーダーの育成～

連携校　福岡雙葉中学校・高等学校

本校の高等学校に設置されている GL（Global Leader）コースでは，グローバルイシューや社会課題など，明確な答えのない問いに対して対処していくために，必要な知識やスキルなどを含むマインドセットを兼ね備えた上で，世界において活躍できる真の女性リーダーの育成を目指しております。そのために実践，及び推奨している教育プログラムのが，ツール（道具）としての英語をベースに行う F.GLEP（Futaba.Global Leader Educational Program の略，コースオリジナルの総合探究プログラム）と，立命館宇治高等学校を拠点校とした WWL の連携プログラムです。この２つの学びと経験，そしてそこから生じる活動が化学反応を引き起こし，イノベーティブな行動を主体的に実践する生徒を生み出すのに成功しております。つきましては，本年度における WWL 連携にて得た具体的な実践と成果について報告させていただきます。

１．WWL FOCUS2021 全国リーダーズキャンプ九州ブロックの運営に関して

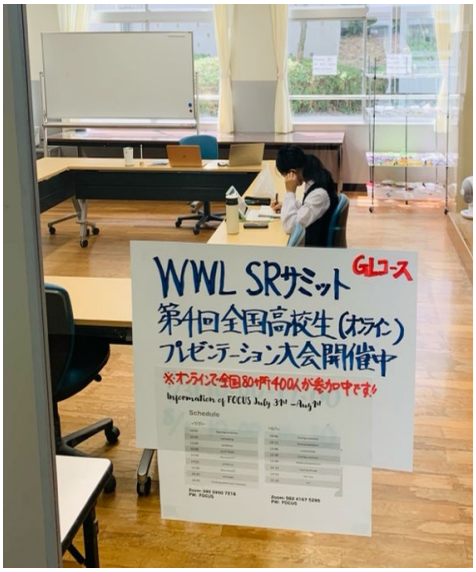
FOCUS2021 で企画された全国リーダーズキャンプにおいて，本校の GL コースに所属する生徒の中から主体的に手を上げたメンバーを中心にチームを結成し，九州ブロックの運営を担当させていただきました。

当初立命館アジア太平洋大学のキャンパスを会場とし，対面にて実施する予定であったにもかかわらず，COVID-19 感染拡大により，全てのプログラムがオンラインに切り替わり，PC やタブレットを活用しながら，対面以上の成果を目指すという非常に難しい運営となりました。しかしながら，ファシリテーションを担当されたタイガーモブの中村寛大氏の力強いサポートのもと，メンバー全員が何度もミーティングを重ね準備して臨んだことで，当日チーム力を見事に発揮することができ，生徒たち想定以上の大きな成果をあげることができました。

＊全国リーダーズキャンプの運営に関わった本校 GL コースの生徒たち

2. WWL FOCUS2021 SR サミット 第４回全国高校生プレゼンテーション大会参加

本年度本校からは４チームが参加。各チームが設定した社会課題を解決するためのプロジェクトをもとに，全国から参加した生徒たちと混ざり合い，白熱した議論によりブラッシュアップされた内容を発表した。生徒の感想としては本校 GL コースのメンバーでチームを編成し，プロジェクトを進めてきたが，本大会に参加するまでは全く考えもしなかった発想や視点が与えられ，プロジェクトが一気に加速したとの意見が殆どであった。FOCUS の素晴らしさは，時と場所を超えて，同世代の生徒たちが，それぞれ違う文化と基盤をバックグラウンドに，混じりあうことで化学反応を起こし飛躍的な成長を遂げることにあると考える。



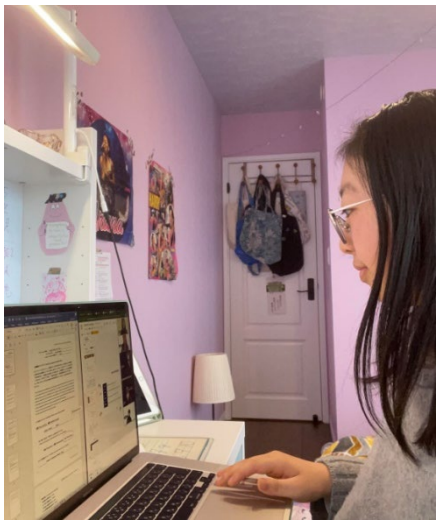
＊SR サミット FOCUS2021 に参加する生徒

３．WWL 連携 高校生国際会議 Global Youth Fair (GYF)－ SURVIVE 参加

３日間の日程で行われたオンラインでの本企画は，文部科学省指定 WWL コンソーシアム構築支援事業の拠点校として，立命館宇治高等学校の生徒たちが創造した国際会議で，本校を始めとした国内の連携校の生徒たちと，海外から参加した高校生たちが，英語をツールとして混じり合い，SDG s が達成できなかった世界をどのように受け止め，歩んでいけば良いかを真剣に議論する企画でした。本校において GL コースの探究活動を経験し，同時に WWL 連携校として，様々な企画を通じ，全国の生徒と混じりあい刺激しあってきた本校の生徒が，本国際会議でチームのリーダーを主体的に務め，バックキャスティングで様々な課題を丁寧に整理し考察しながら，チームの

メンバーと共に，未来の世界を創造していく姿は，オブザーバーとして参加していた私たち教職員の想定を遥かに超越し，感動を覚えるほどでした。

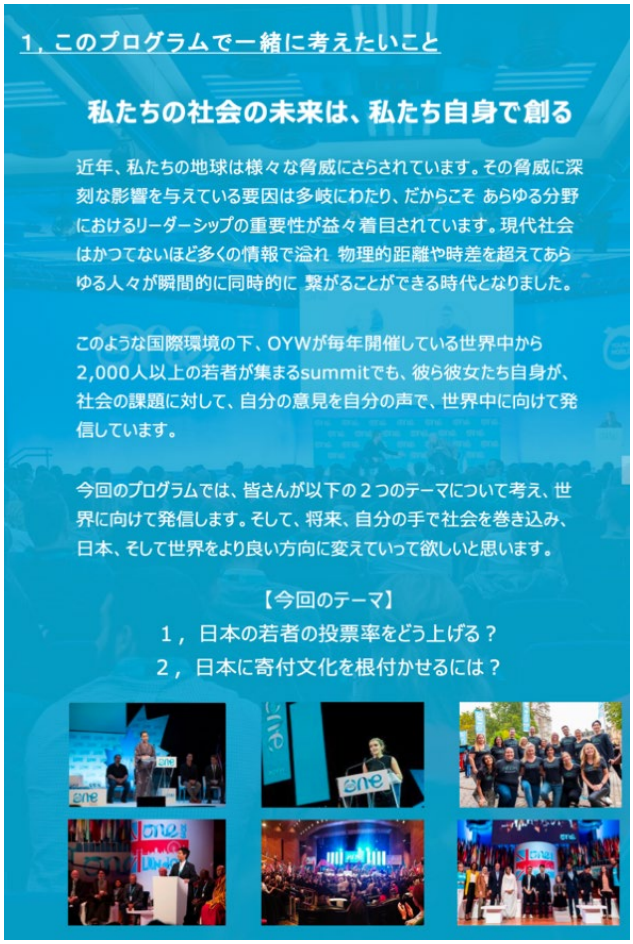
まさにWWL連携における成果の集大成とも言える本国際会議は，本校から参加した生徒たちにとっても，何にも代え難い非常に大きな経験となったことは言うまでもなく，今後のそれぞれの進路にまで影響を与えるインパクトを持った素晴らしい機会であったと感じています。WWL連携の企画としてはこれが最後となりましたが，このような素晴らしい成果を発揮する繋がりをここで終わらせず，これからも引き続き，生徒たちが混じりあうことができる場が継続することを強く願います。



＊国際会議 SURVIVE 参加する生徒

４.高校１年生 Global Leadership Program 2021

WWL連携，及びALネットワークにてご紹介いただいたLearning in Contextの空田真之氏のコーディネートで，若者版ダボス会議と呼ばれ，世界的に活動しているOne Young World の日本法人と共同で本校において実施するオリジナルの探究プログラムの開発が実現し，９月からトライアル実践を行いました。



トライアル事業としての初年度であったことから，当然完成形とはいえず，発展の余地はまだまだ残しておりますが，本校GLコースに所属する高校１年生が２学期より実施する探究プログラムとして，最大限成果を発揮することのできる素晴らしい内容になりました。このプログラムを構築できたのも，立命館宇治高等学校を拠点校とするALネットワークにWWL連携校参画していたからであり，あらためてWWL連携，及びALネットワーの成果は，生徒のみならず本校における探究プログラムにまで波及する運びとなり，この想定外の結果に本質的価値と可能性を強く感じました。

＊福岡雙葉×One Young World 共同開発「Global Leadership Program」

＊WWL 連携プログラムに参加した 2021 年度本校 GL コースの生徒たち

（GC・GL コース 推進委員会 委員長 清水　功也）

第４回 全国高校生 SR サミット～FOCUS～参加報告

連携校　立命館高等学校

昨年度に引き続き７月 31 日～8 月 1 日に行われた SR サミットに参加させて頂きました。昨年度同様，今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により，オンライン開催となりましたが，生徒たちが主体的に SDGs に関するプロジェクトを考え，その内容を他校の生徒，海外生や企業関係者の皆様との交流を通して深めていくことができました。本校からは高校１年生３名，２年生９名が参加しましたが，食品ロスや海洋汚染，衣類廃棄など幅広い国際的課題に関心をもち，その解決策についてグループディスカッションを通して考えることができました。

食品ロスをテーマとしたグループでは，学校の生協食堂における食品廃棄削減のために，その日の営業時間内に売り切れず残ってしまった商品を放課後の部活動終わりの時間に，割引をして販売することで少しでも食品廃棄を減らすというプロジェクトを立案しました。また，当日のディスカッションや事後に行われた生協食堂店長さんとの打ち合わせを経て，「法律の問題」や「放課後に生協食堂をオープンすることで起こる人件費問題」，「割引をすることで昼間の営業時間ではなく，その時間帯に商品を買おうとする生徒が増加し，食料廃棄を逆に促進してしまう」という実際にプロジェクトを行う上で避けては通れないリアルな問題に直面することで生徒たちの視野を深めることができました。今後はこれらの問題を，「職業体験的な形で生徒たちが商品の管理から販売までを行うことで人件費を削減する」，「売れ残り商品に対する割引ではなくポイントカードへのポイントの付与」や「その日の売れ残りが一目で分かるようなアプリの開発」などを行うことで課題を解決していく予定です。衣類廃棄に着目したグループでは，各家庭で廃棄される予定の衣類を，服飾学生にデザインしてもらったエコバックとして再利用するプロジェクトを立案しました。こちらのグループも当日のディスカッションを通して，「エコバックを作るという一時的な解決だけでなく，周りの人たちの衣類廃棄に対する関心を高めていく長期的な解決も必要である」ということに気付くことができ，小学校を訪問して小学生や保護者の皆様に衣類廃棄が引き起こす社会問題についての出張授業の計画や，小学生が安全にエコバックを作成するために針やミシンをつかわないエコバックのデザインを服飾学生と共に思案するなどの活動をしてきました。

現在は新型コロナウイルス感染拡大の影響で満足にこれらの活動を行うことができていませんが，実施に向けて長期的かつ継続的に取り組んでいきたいと思います。今回の SR サミットに参加することで，社会的問題への理解はもちろんのこと，事前・サミット中の議論・事後の取り組みを通して，実際に生徒たち自身が平和で持続可能な社会を作っていくにはどうすればよいのか，そしてその実現のため乗り越えなければならない現実的な問題を生徒たちに実感させることができました。様々な高校生や民間企業の方々，そして海外生とアイデアや情報を共有し，協働し，実現に向けて行動することで，教室や学校内では得ることのできない貴重な経験をさせていただきました。

Rits Super Global Forum 2021 Online での協働学習について

連携校　立命館高等学校

立命館学校にて 11 月 9～13 日，海外の高校生と世界のさまざまな社会課題について話し合う「Rits Super Global Forum 2021 Online」(RSGF) を開催しました。この RSGF は，立命館高校 GL コースの生徒たちの高校生活の学習の集大成とも言える国際行事で，約 1 年前から生徒実行委員会で議論を重ね，創り上げます。第 8 回目の開催となる今年度は，昨年度からさらに新たな 2 校を参加校として迎え，12 カ国・地域から 17 校の海外生 130 名が参加しました。立命館宇治高校からは 7 名の生徒が参加してくれました。Zoom などのウェブ会議システムだけでなく，YouTube ライブ配信や Google Classroom, Padlet などのオンラインツールを最大限に活用し，昨年度のオンラインツールを活用したフォーラム開催の経験が活かされ，さらに発展的な行事になりました。

RSGF 2021 Online のスローガンは“Start a New Era!”未来を創造するのは自分たちの世代であり，自分たちが動き出すことでコロナ禍を乗り越えた新しい時代を切り拓きたいという生徒たちの思いが込められています。そして，今年度のメインテーマは，“Designing a Sustainable Future - Creating a Virtual Country as a Model for Possible Future Action”でした。コロナ禍で露呈した様々な問題は，世界の社会課題と複雑に絡まっているという問題意識から，それらの課題を見つめ直そうと，3 つの社会課題を持つ「仮想国」を設定し，どのようにして Sustainable (持続可能) で Resilient な（逆境から回復できる）社会を構築できるか，ロールプレイングで 5 日間にわたって議論するというものです。生徒達が設定した 3 つの問題とは，SDGs との関連も意識し，「気候変動による災害と防災」，「産業発展と環境破壊」，「移民と格差問題」です。英語での議論の中では仮想国をビジュアル化し，自分たちが描く未来をアートで表現するという STEAM 教育の手法も取り入れた取り組みとしました。海外生との議論を経て完成した「Sustainable Future」の絵は，生徒達の努力の結晶であり，地球の未来への道しるべでもあります。生徒達は，「サステナビリティについて海外生と共に考えたことで，多角的なものの見方に触れ，世界の多くの課題解決のために，将来自分達ができることを行動に起こしていかなければならないと思った。」と感想を述べてくれました。

2 月には RSGF Reunion Meeting を開催し，11 月に議論した内容を，自国や実際の世界の社会課題に応用して考えてみることで，高校生にできることは何かを考え取り組む機会としました。RSGF で出会った海外生とオンライン上で再会し，未来に受け継ぐ地球環境を自分たちが担っているのだということを実感してくれたと確信しています。

WYM (World Youth Meeting) , ASEP (Asia Student Exchange Program) 参加報告

連携校　立命館高等学校

WYMは，例年８月第１週に，高校の部は主にBKCで，大学生の部は主に日本福祉大学で開催されるプレゼンテーションのイベントです。主に台湾高雄市教育委員会と連携して行っていますが，アジアの他の国々からの参加もあります。ASEPは逆に，台湾高雄市教育委員会主催で台湾高雄市の於いて１２月末に行われるイベントです。
WYMやASEPは，海外の学校と連携し，１つのチームを作って与えられたテーマを工夫してプレゼンを競い合うイベントです。残念ながら本年もコロナ禍オンライン開催となりました。WYMは２０２１年８月５日・６日，ASEPは同年１２月２７日・２８日の両日に大会が実施されました。メインテーマはともに SDGs を基にそれぞれ WYM が「Regeneration and sustainability」，そしてASEPが「Action for SDGs in Post-Pandemic Era」でした。

今回のWYMには，海外から，台湾３校，カンボジア１校２チーム，インドネシア２校１チーム，インド１校の７校７チーム編成で参加しました。今回は，SDGs１７のゴールに向けて，各チームがそれぞれのゴールに対してのアクションプランをどのように自分たちのプレゼンに持ち込めるかがプレゼン作りのポイントとなりました。６月半ばから相手校とチームを編成し，ZOOMやLINEで連絡を取り合い，テーマであるSDGs１７のゴールに向けてのプレゼンン用のスクリプト及びスライドの作成に取り組んできました。また，同時に，立命生だけで，テーマに沿ったディスカッション用のビデオも制作してきました。期末テストを挟んで大変だったと思いますが，プレゼン準備だけでなくビデオ作成をもすることにより，より SDGs の取り組みへの理解が深まり，加えてビデオ用に何度も何度も自分たちの英語を録音することを通して，英語を発音し，英語で表現することの意識の向上にもつながったようです。参加各校は，それぞれEFLとして英語学習に取り組んでいますが，参加者はみんな高い英語力を持ち，かつSDGsへの意識も高く，加えて知識も豊富で，本校生にとっては多くの学びがあり，良い刺激になったようです。初日のプレゼンテーション発表から，２日目はディスカッション部門，Showcase部門，Café Talk部門など様々な取り組みがあり，参加者にとってはとても学びの深い取り組みとなりました。２０１９年度新設された文部科学大臣賞は，この２年間連続して受賞してきましたが，今回は残念ながら受賞することはできませんでした。しかしながら，それぞれ各チームよく頑張り，以下の賞を受賞することができました。

（１）　VIDEO Award（９チーム中）

２位　Outstanding Video Award：#4 Quality Education チーム

３位　Excellent Video Award：#3 Good Health And Well-Being チーム

（２）　PLATINUM Award（２４チーム／４５チーム）

・　カンボジアチームA，カンボジアチームB，高雄女子高級中学チーム

（３）　CHAIR of JUDGES Award（３チーム／プラチナ２４チーム）

・　高雄女子高級中学ーム

注：CHAIR of JUDGES Award は今年度設置された賞で，プラチナ賞の上位者に与えられる賞

ASEP には，台湾高級中学３校と国民中学１校（中学対応）の４チーム編成で参加しました。基本は WYM と同じ流れで，１１月から相手校とプレゼン作りを始め本番に臨みました。結果は以下の通りでした。
（１）PLATINUM Award 高雄女子高級チーム（３チーム／３０チーム）
（２）GOLD Award 高雄高級中学（６チーム／３０チーム）
（３）GOLD Award 五福国民中学（２チーム／１５チーム）
ASEP では，WYM のようにビデオ表彰やカフェートークのような様々な取り組みがなく，プレゼンテーションを争うのみのイベントとなりましたが，海外校とのコラボレーションを WYM に引き続き行えたことは参加者にとってすごく意義深いものとなりました。

WYM 参加生徒 A の感想文

立命館高校に入ってから何度も英語でプレゼンをすることはありましたが，いつも気にするのは発音が合っているか，スクリプトの文法が間違っていないかということばかりでした。もちろんそれらもとても大切なことです。しかし，今回の活動を通して，大事なのはそれだけではないと気付かされました。

スピーキングについては，とにかくゆっくり読むこと。流暢に聞こえるからといって早口で喋っても，相手には伝わりません。遅すぎてもいけませんが，一単語一単語をはっきりと発音することが重要だと感じました。また，キーワードは強調して読むこと，話題によって声のトーンを変えることも良いプレゼンには欠かせないでしょう。自分が今回読んだパートは明るく楽しい話題だったので，精一杯楽しそうな表情と声色を意識しました。話しているこちらが興味なさげに見えてしまうと，聞き手も興味をなくしてしまうのではないでしょうか。

スクリプトは，内容がもっとも大事。アクションプランが「政府がこういう対策をとることを望みます」というようなものになってしまってはいけないのです。一介の高校生にもできるような小さな行動が，世界にちょっとした，だけど大切な違いを生み出せる。自分たちに何ができるか考える，というのが今回の WYM の趣旨だと思うからです。理路整然とした説明や聴衆への問いかけなどで，わかりやすく聞いていて飽きないものにすることも不可欠です。

これらのことは，相手校とのミーティングや，先輩からのご教示によって知ったことです。発音などは，先生や先輩からの細かいフィードバックがいただけて，WYM に参加する前よりも数段レベルアップすることができたと思います。今まで間違えて覚えていたことなどは直すのに苦労しましたが，最初に録音した音声と本番近くに録った音声を聞き比べると格段によくなっていて，本当に感謝の気持ちしかありません。
プレゼンのスキルだけでなく，英語で自分の意見を伝える方法や，ミーティングの日時を決める際のスケジュール管理，オンライン会議用のアプリの使い方など，さまざまなことを学べました。実は今回のプレゼンのトピックは自分の意見が元になっています。最初は「環境ではなく，人間についての持続可能性についてやりたい」という漠然とし

た考えでしかありませんでしたが，グループの仲間達が質問をくれたり，それぞれの考えを足してくれたりして，あそこまで深く，社会的意義のある内容にまで昇華させることができました。これら経験は，来年の WYM や他の英語を使うイベントの時だけではなく，これからの高校生活全般に役に立つだろうと思います。

当日はインターネットや機械のトラブルでなかなか時間通りにいかないこともありましたが，この二日間は本当に楽しかったです。ディスカッションで見知らぬ人と話したことやさまざまな国の文化を紹介する素敵なパフォーマンス，そして何より審査員賞を頂けたことなど，良い思い出がたくさんできました。協力してくださった先生方や先輩方，同じグループの人たちに感謝するとともに，次の機会では自分がこの経験を元に，そちら側に回れるように頑張りたいです。

ASEP 参加生徒 B の感想文

私は今回 ASEP2021 に参加できて本当に良かったなと思っています。WYM ではたくさんの後悔が残っていたので，今回はそれを生かしたいという気持ちで取り組んでいました。全体的に積極的に取り込むことができたと思うので自分としても参加する意味を見出せたなと思っています。しかし，全てが完璧というわけではなく反省点もありました。反省点としてはまず，相手校と話し合うスタートが遅れてしまったことです。それによってテスト期間が始まる前までに，トピックは決まったもののしっかりとした議論ができておらず 2 つの学校間で手違いがあり，2 校の意見がバラバラの状態のスクリプトが出来上がってしまって本番直前にバタバタしてしまいました。また，スクリプトやスライドを作り終わるのが遅かったためプレゼン自体の練習の期間を長く取ることができませんでした。これはミーティングの時に決めること 1 つ 1 つがやんわりと抽象的にでしか決まっていなかったから起こってしまったと思います。このようなオンラインでの活動では，本当に大事なことは実際のミーティングの中で決めなければならないので，そのミーティングが始める前に何を決めないといけないのかはっきりさせてから始めないといけないなと思いました。

今回の特に良かったことは，プレゼンのことだけでなく高雄の友達とたくさんコミュにケーションを取ることができたことです。直接会えない中でのプロジェクトをするときは，そこですることに関することのみの連絡になってしまいなかなか仲を深めることは難しいかもしれませんが，ミーティングの後などに趣味を聞いたり，中国語の単語を教えてもらったり，また，日本のアニメや音楽に興味を持ってくれていたのでその話をしたり，この ASEP ではチームのみんなと本当に仲良くなることができたなと思っています。

私自身この AESP では主体的に取り組むことができました。後半になるにつれて本番が近づいたこともあり，焦りもありましたが，日本人チームの中でみんなで意見を出しながら，少しまとめる役割もできたのかなと思っています。初めに書いたようにバラバラのスクリプトが出来てしまったので，最後に私がそれらを組み合わせた案を作ったのですが，グループのプレゼンなので，初めから役割分担や内容をはっきりさせてもっと計画的に見通しを持ってゆっくりと話し合うことができるように次回はしたいなと思っています。自分の本番のプレゼンについては，後から見てみると，話す波としては悪

くはなかったと思いましたが，やはりカメラが見れていなかったことが残念だったと思いました。プレゼンを発表しているときの自分は意識しているつもりでも他のことに気を取られた途端すぐ目が逸れていたのでもっと練習をしないといけません。それからジェスチャーが画面内に映っていない時があったのでそこも改善しなければならないと思いました。Q & A については１問答えることは出来ましたがもっとガツガツ行かなければいけないなと思いました。また答えの内容も，返答にはなっていたけれど薄かったのでまだまだ語彙力と話す力が足りていないのでこれからもたくさん学習を積んでいかなければならないなと感じました。

この ASEP ではたくさんのことが改善でき，満足までは行かないけど楽しくやり切ることが出来ました。そして同時にたくさんの自分に足りていない点，課題が見つかりました。それらをこれからのたくさんの活動に活かしてどんどん自分自身を成長させていきたいです。

第５章　10. 立命館高等学校(4)

Global Youth Fair ～SURVIVE! 2022～ に参加して

連携校　立命館高等学校

本校より FOCUS，After FOCUS にも参加させていただきましたが，Global Youth Fair ～SURVIVE！ 2022～にも参加させていただきました。そこでは海外校を含め，より多くの学校間での意見交流の場となり，参加生徒にとって大きな学びがありました。

特に特徴的だと感じたのは，運営にあたっていた立命館宇治高校の３年生とそれを支える先生方の情熱，エネルギー，そしてチームワークの良さが際立っていたことです。FOCUS でのノウハウを上手く活かしつつ，コロナ禍であっても Proactive に新しいことに取り組む姿は，まさに近い未来を担うグローバルリーダーへと成長している証なのだろう，そしてこれまでに至る一つ一つの教育活動が意味を持ち，生徒一人ひとりの中に根付いてきたからだろうと思いました。このようなネットワークの中で，お互いにインスパイアし合いながら共創していく場を今後も大切にしていきたいと感じました。

最後に，本校より参加した高校１年生の感想の一部を掲載させていただきます。

「チームメイトや立命館宇治の運営の人たちの英語力がすごすぎて，驚きました。そんな中で，自分の意見を話さないといけない場面が沢山あって，なかなか思うように話せなくて，めっちゃ凹みました。でもそれ以上に，こんなふうに英語でもっとディスカッションしたいというモチベーションになりました。そして，完璧な英語で話さないといけない！っていう意識よりも，間違ってでもいいから何か言ってみる，わからなかったら教えてもらおうというくらいの意識の方が緊張もしないし，言葉がわからなくても距離が縮まるということに気づきました。このような悔しさや気づきは，今後の私の高校生活を大きく変えるものになると思います。」

人との触れ合いを通して

連携校　立命館守山高等学校

今年度も連携校として，立命館宇治高校主催の活動に参加させていただき，生徒たちがすばらしい経験を積むことができました。
生徒は人との触れ合いを通して大きく成長します。
今年度目にした生徒の例を紹介します。

一人目は，人とのコミュニケーションを通して考え方が変わった生徒の例です。
この生徒は，昨年度，フィリピンのオンライン研修に参加しました。
Zoom でのオンライン研修中に，現地の同年代の女子生徒から実際に聞いた貧困の実態に衝撃を受け，PC の画面の前で涙を流していました。そして，今年度，探究活動のテーマにフィリピンの子どもの基礎教育の支援を掲げ，社会に対して自分自身に何ができるかを追求していました。
本や Youtube 動画でも知識を得ることはできますが，心に深く刻み込まれる大きな衝撃は本物の体験を通してこそ得られるものだと感じました。

二人目は，他校の生徒との関りの中で向上心に火が付いた生徒の例です。
この生徒は昨年度模擬国連に参加し，自分自身の知識やスキルが不足していることを痛感し，その後，プレゼンテーションやディベートのスキルの向上に積極的になり，今年度，再度チャレンジしました。
グローバル人材の育成には，外に出て人との関りの中で様々なことを感じとらせ，成長させていく環境が必要です。
Beyond Borders の精神で，クラスや学校や地域の枠をこえ，外の世界に触れることを通して，己を知り，自分の身近にあることをより深く理解できるようになります。この生徒も，外の世界との接触が成長につながりました。

立命館宇治高校が拠点になり，連携校に提供してくださるプログラムには，国境を超えたもの，他校の生徒と触れ合うものなど様々なものがあります。
学校間の連携で学校の枠をこえて，お互いの生徒を成長させるとことも意識にしながら，生徒の成長を支援していきたいと思います。

（グローバルコース主任　壷坂宣也）

WWL「で」生まれた WWN（N:Network）の価値と期待

事業協働機関　公文教育研究会

３年間を振り返って，生徒たちに多方面で大きな成長が見られたことは他の報告からも明らかだと思います。ここではあえて，先生方，学校や企業・団体･･･，この活動に関わる大人たちの垣根を越えたつながり，WWL「で」生まれたネットワークの価値，今後の可能性を中心に記します。

■成果を下支えした大人たちのフラットで熱いネットワーク

コロナ禍のさまざまな制約条件の中でも，生徒たちの学びを社会とつなぐために･･･，「学外協力・共創」をより良い形で支援・サポートしてくために･･･，自校内に留まらず，他校や協力企業・団体が「フラットに，混じり合って」知恵を出しあう姿が何度も見られました。まさに生徒たちに望むことを，大人たちが実践しました。

その前提となったのが WWN。幹事校の先生方がイニシアティブをとり，関わる大人たちが，お互いを知り，信頼関係・心理的安全性を高め，自由に意見が言える場を繰り返し設定してくださいました。これがさまざまな活動や成果の下支えになったものと確信します。（生徒がデザインしたロゴマークを模して，WWN のロゴマークまで作成してしまう遊び心と真剣さ。N=Network である が Nomikai という説も）

生徒作　　大人作

■先生たちがロールモデル

社会課題解決に取り組む実践者や，専門性の高い有識者などの力を借りることも多くあります。憧れの存在となるような，ロールモデルに出会うことは大事ですが，ともすれば「有名な人」「すごい人」に光が当たりがちです。しかしこの先生方は，生徒たちのために「有名な人」「すごい人」とも，立場や状況，フィールドの異なる方々とも，協働・共創を行う姿を見せ続けてきました。生徒たちにとって，最も身近な大人である先生が，一番のロールモデルになれたのではないでしょうか？

ホンネと本気で，相談し合う，越境している大人の姿を見ながら，生徒たちは，これだけ多くの大人たちが一緒になって自分たちを支えてくれていることも，多様な方々との協力によってこそできることがあるという実感を高めることもできたでしょう。

■さらに豊かなネットワークへ

その後も WWL を通じて知り合った生徒同士，大人たちは「気になる存在」であり続けます。SNS 上には，お互いの活動の進捗（時には挫折も）を共有し，成果を喜び合う様子が溢れています。中には大きな賞を受賞したり，TV 番組に出演したりという生徒も現われました。しかしそれは，もう「すごい人」ではなく，活動を共にした「仲間」で

あり，自分を勇気づけてくれる最も身近な存在なのです。

WWLは最終年度を迎えますが,こうした良質のつながりを大切に維持し,さらに深め,広げていくことで，大きな可能性が広がると考えます。３年間WWLの恩恵を受けた生徒たちが，後輩たち，お世話になった方々への恩送りとして，それぞれにできる応援を続けてくれることを期待します。それによって，WWLという制度があったからできた（なければできない）こと「ではなく」，制度が終わっても継続・発展できることになるはずです。

弊社は，幼児・小学生を中心に，教科学習を通じて「自ら学ぶ力」を身につけて欲しいと努めていますが，このWWLは，そうした子どもたちに，学びの先にあるもの，少し先の姿やさまざまな可能性があることを示し，大きな勇気を与えてくれるものです。

（社長室・渉外担当リーダー　鳥居健介）

アントレプレナーシップを軸にしたプロジェクト活動支援
～学びはコンテンツから環境へ～

事業協働機関　タクトピア株式会社

今年度も引き続きコロナ禍によりオンラインでの活動がメインとなりましたが，生徒さんたちの適応と熱意の度合いはますます向上しているように感じた年でした。弊社が中学校・高校様に提供しているアントレプレナーシップ学習のナレッジを活用して，「全国高校生 SR サミット FOCUS」にて生徒さん向けのオンライン講演およびリーダー研修を実施させていただきました。

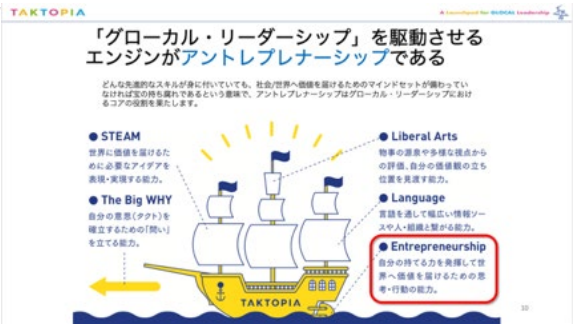
講演に関しては，各学校からの生徒さんが PBL 活動に取り組む文脈のなかで，弊社は「最高のプロジェクトをつくるための 4 つの質問」と題して，PBL をおこなっていくうえで漫然/曖昧となりがちなポイントを生徒さん自身が問い直せるようなサジェスチョンをさせていただきました。

またリーダー研修については関西会場を担当し，講演では紹介するのみに留めたプロジェクト立ち上げの検討プロセスを，実際にリーダーを担う生徒さんとワークしました。問題意識の言語化や解決策の発想法，プロジェクトのゴールイメージなどを，さまざまなワークシートや思考ツールを用いて検討し共有することで，PBL を成功裏に導くための基礎づくりに貢献できたと感じております。

今年度は特に，昨年度の報告書で述べさせていただいた「外的要因による変化にしなやかに対応し，前向きに挑戦していく大人（先生方）の背中」のパワーを強く感じることができました。イベントの運営に関して，昨年度にも増して生徒さんが司会や Zoom の裏方など多方面にわたって責任を持って役割を果たす姿は，大変頼もしく立派でした。このコンソーシアムは今年度でいったんの節目を迎えることになりますが，生徒さんたちが代々これからも自主的にプロジェクトを起こし社会へ働きかけていくプラットフォームとしての WWL を守り立てることが弊社の責務と感じておりますし，参画されている産学官のプレイヤーの皆さまとさらなる発展系を描いて行きたく思います。

（代表取締役 長井悠）

参考：講演で使用したスライド（抜粋）



参考：リーダー研修で使用したスライド（抜粋）

世界の高校生の事例 – ReThink（米国）

World Youth Meeting 開催

事業協働機関　株式会社 内田洋行

World Youth Meeting ホームページ

立命館宇治中学・高等学校様が WWL 構想計画書でその活動の一環として参加されている，弊社協賛・協力の「World Youth Meeting 2021」が 2021 年８月月５日,6 日に開催されました。今回で第 23 回目の開催となります。文部科学省後援，学校法人立命館と日本福祉大学の共催で主にアジア地域の高大生による英語での協働での SDGｓを基にした英語での課題解決プレゼン発表を中心とした国際交流プロジェクトです。開催は昨年同様コロナ禍でオンラインでの実施となりましたが，海外は台湾，ベトナム，インド，中国，韓国，フィリピン，カンボジア，マレーシア，インドネシア，タイ，ネパール，ミャンマーなど広くアジア地域より多くの参加があり，国内 19 校，海外 41 校合計 60 校が参加し，基本的に海外校＋国内校のグループ作り 45 のオンラインプレゼンテーションを実施しました。

プログラムは昨年のオンライン実施経験を活かし踏襲し，全員アクセスでの Youtube による開会式に始まり MS/TEAMS でのオンラインルームを３部屋作りそれぞれで発表いたしました。本年のテーマは「Regeneration and Sustainability」とし SDGs 自体から一歩踏み込んで，自分の周囲と SDGｓとの関連を問い直しいかに達成へのアクションを自分たちで起こせるかに観点を置き，そのため「Presentation with Responsibility」を評価基準に取り入れ課題提案をめざしました。また，SDGｓに即した 9 室に分けた小テーマでの自由参加のディスカッション「Discussion Session」の実施，昨年好評であった 4 室のフリートークで交流を図る「Café Talk Session」，各国各自の自慢の歌やダンスを披露する「WYM Showcase」も拡充実施いたしました。

次に本年度の開催の特徴を立命館宇治中学校･高等学校さんの WWL での実践成果を踏まえた World Youth Meeting への影響・効果を含めて挙げてみます。

まず，各国学校閉鎖が行われていることもあり，事前の意識を共有し参加レベルの維持と意思の向上のため，日本と台湾の大学教員を中心としてプレゼンテーションの作成方法やオンラインでの英語の Q&A の方法やマナーなどの事前セミナーを１ヶ月前から計８回開催し国際連携のノウハウをさらに積み重ねられた事，すなわちこれは教室や学校，国の枠を超えて世界規模での教員や生徒の「学びあい」のネットワーク実践を実施できました。

次に，昨年同様にオンラインでもお互いの交流関係を深めるための自由参加の「カフェトーク」プログラムの実施です。本年は大学生１部屋，高校生２部屋，教員１部屋に拡充してルーム担当校を決め生徒自身がファシリテーター役を担いました。生徒ファシ

リテーターはルーム活性化のためにツールを使って参加者の興味関心を拾い，チャット欄を駆使して意見の吸い上げを効果的に実施し，リアルに比べてオンラインでのメリットを ICT を駆使して活動できる能力が明らかに昨年よりは前進しました。中でも文部科学省（後援）への World Youth Meeting 報告書に，WWL 経験の立命館宇治中学校・高等学校の生徒が「カフェトーク」終了後にも将来にわたって繋がっていけるために生徒達で使用しているインスタグラムアカウントを交換するなどのアクションを起こしたことが先生により報告されています。World Youth Meeting の将来への継続に大きく寄与していただいたと認識しています。

さて，World Youth Meeting は単に英語プレゼンテーションの優位を競うプレゼン大会ではなく生徒・学生の本来的，教育的意味での国際交流活動の継続を前提に 23 年間の活動をしてまいりました。とは言いつつも発表の成果として何かしらの賞を用意して参加の励みにすることを活動の基本としております。その中で，WWL 活動 3 年目の立命館宇治中学校・高等学校さんは本年度の World Youth Meeting におきまして，審査員特別賞をはじめ計 3 種の賞を獲得されました。このことは，WWL 参加活動がそれ自体の体験でなく，以外の国際交流活動や ICT の利活用へと拡大実践されていてお互いの活動にとって相互に互恵な関係が波及している結果での評価と思います。

このように立命館宇治中学校・高等学校さんの参加によってお互いに波及しあう国際交流プロジェクトの意義・継続が図られる効果の上で，WWL 活動の更なる発展を期待いたします。

FOCUS 2021 プロジェクトリーダープログラム（関東）

事業協働機関　一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）

本年度は生徒発表に対するフィードバックを持った他，７月にオンラインにて開催された FOCUS にて教員向けのプログラムを担当しました。

生徒たちの取り組みが進む裏で，探究学習を担当した教員が改めてそれぞれの探究活動を振り返り，相互の実践から学び合う機会を作ることを目的に，GiFT のグローバル教育プロデューサーの木村が２時間オンラインでワークショップを行いました。

FOCUS キックオフに向け，全国各地の生徒が課題解決に向けて取り組む中で，リーダー的な役割を担う学生にとっては，それぞれのプロジェクトの遂行に向けて必要なことは何かを考えることが目的です。

アイスブレイクの後は，「リーダーとはどのような人を表すのか」という問いから，内省的な時間をとり，いくつかのケースに分かれて小グループで話し合いました。その後様々な形のリーダーシップがあること，共通して大切な要素とは何かを皆で考える機会を持ちました。

その後，事前課題で用意したワークシートを用いて，FOCUS で自分が期待されていること，自分が大切にしたいことを含めた個々の「リーダー像」を具体化させ，小グループで共有していきました。

それぞれのリーダー像をもとに，後半はプロジェクトの進行にあたって大切な視点についての講義の後に，実際に自分が行うプロジェクトのゴールや方針，評価方法などについて詳細を考えていきました。最後に FOCUS での学びや経験を通してどのような自分になっていたいか，どのような結果をもたらしていきたいかを各地区の共通フレームワークに落とし込み，個々のビジョンから心構え，行動規範と具体的な方略について言語化，ビジュアル化する時間をとりました。

（理事　木村 大輔）

探究教材動画

事業協働機関　Learning in Context

今年度もWWLの中で生まれた探究プロジェクトの動画教材を制作いたしました。

◆動画の目的

これから探究学習に取り組む高校生たちが，上級生の探究プロジェクトでの学びを追体験することにより，彼ら自身が今後のイメージを膨らませ，イメージを持って取り組めることを目的としました。また，プロジェクトの制作の過程で探究学習に必要な力を見つけ，言語化することを目的としました。

◆動画教材の意義

探究プロジェクトには決まった正解はありません。そして，プロジェクトを進めるうえで，生徒たち自身が自分自身を取り巻く環境から課題を発見し自分事化することがとても大切になります。加えて，プロジェクトを進める過程でどのような苦労があり乗り越えたのかを内省することが次につながります。それらは本人たちが感情を持って彼ら自身の声で伝えることが，これから取り組む高校生たちにより伝わる方法であるため，動画教材を制作いたしました。

◆対象プロジェクト

１，ポンズ　もったい苗プロジェクト

２，サバイブ　国際会議開催

◆取材から見えた探究学習に必要なちから

人を巻き込む力，コミュニケーション力，多様性を認め尊重する力，常識を疑う力，やりきる力，自分の現状を認識する力，課題を発見する力，一歩踏み出す勇気，行動力プレゼンテーション力

（空田）

『次世代リーダーの創出』を目指した探究的な学び
～最も個人的なことが最も推進力がある～

事業協働機関　Tiger Mov, Inc.

今年度も引き続きコロナ禍での活動となりましたが，弊社が展開するオンラインを活用した世界を舞台にした学びを中心に，主に３つの活動を展開させていただきましたので，それぞれについてご報告いたします。

1.FOCUS リーダー合宿運営

タイガーモブが全国の教育機関と連携して提供させていただいている「Learning by Doing」を軸にした次世代リーダー創出のメソッドをベースにし，立命館宇治らしい尖ったプログラムを九州のリーダーの皆さんに提供いたしました。

プログラムはオンラインという制約もありながら，福岡雙葉高校の学生運営チームの強力なサポートと，30 名全ての参加者のやる気で画面から熱狂している様子が伝わってくる時間で，2 日間あっという間の時間でした。

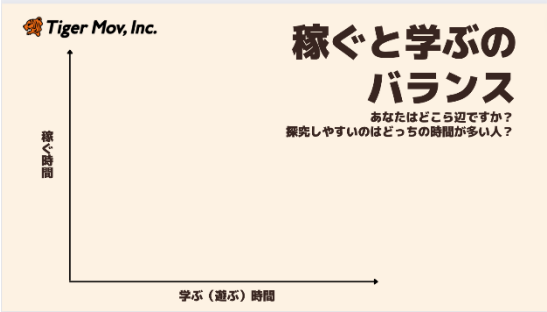
活動を通じて，自分だけのビジョンを描き，解決策を導く考え方。そして，失敗することへのマインドチェンジ。学生の特権についてお話しさせていただき，その後の参加者から，「より社会と繋がりたい！」とタイガーモブのユーザーになったり，「活動の理解を深めるために，社会人を紹介してほしい！」と個別にアプローチをしてくださったり，多くの課外活動が生まれる起点となる機会になったのではないかと思います。

一方で，リーダー合宿における着火はできたものの，その後の FOCUS でうまくリーダーシップが発揮できないなど，悔しい結果となり涙する生徒も中にはいましたが，それも含めて，「Learning by Doing」で経験から学ぶ良いきっかけが提供できたと感じています。これも，立命館宇治の AL ネットワークによってたくさんの教育機関やそれを支えるサポーターがいるから実現した機会だと強く感じております。

一緒に運営した，長井さん，木村さん，芦田さんは日本の中でも有数のファシリテーターであり，そうした人が是非とも協力したいと思える熱量を持つこのネットワークを産んだことに非常に価値があると感じています。

このネットワークがこれからも継続できるよう，お互い支え合い，日本の教育の未来をともに作っていければと思います。

＜参考資料＞



いずれも FOCUS リーダー合宿当日投影資料

2. 全国オンライン部活動 「FLAG」の開催

弊社が企画・運営を担う形で，WWL 連携校を対象とした，学校の枠を超えたオンライン PBL 部活動「FLAG」を開催いたしました。アジアやアフリカなど世界中から起業家や専門家ゲストを呼び，全国から集まった 46 名の中高生が，完全オンラインで放課後の時間を使って，3 か月間の探究活動を行いました。

WWL 連携校に在籍する中学生・高校生を対象とした公募型プログラムの実施は，本 WWL にとってもこれまでにない新しい取り組みであり，大きく 3 つの狙いがありました。

第一に，WWL 連携校による学校の垣根を越えた中高生の学びの場を創ることです。1 学校単独では，世界と繋げた学びの場の設計などは，リソースが限られており実現が難しいです。また，課内のカリキュラムで工夫することもハードルが高いことです。WWL のネットワークを活用して，放課後の時間を使って，北海道から福岡まで全国から，また中学と高校が異学年混合で，学校の垣根を越えて長期間に渡りプログラムに参加したことは，全国的にも珍しい取り組みでしたが，結果として，1 校単独では実現できない多様性ある学びの場を創ることができました。

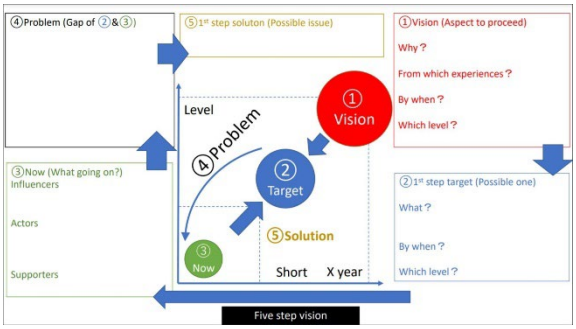
第二に，単発ではない学びの定着を起こすことです。3 か月の長期間だったため，短期に比べてじっくりと自己と向き合い探究することを促し，参加者同士の切磋琢磨

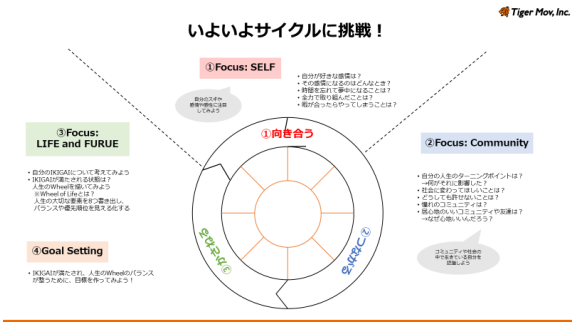
を生み出すことができました。また，オンラインの特徴を最大限生かし，インドネシア，南アフリカ，京都，など様々なエリアから起業家ゲストを呼び，参加者の世界を広げることもできました。

第三に，Project Based Learning 型で生徒自ら課題設定を行うことです。学校内の探究学習では，地域や学校の特色で探究のテーマが決まっていることも多いです（地方創生，震災，平和，など）。しかし FLAG では，弊社が開発した IKIGAI フレームワーク等を活用することで，完全に個々人の内発的動機にフォーカスしました。これにより，自分の過去の軌跡や将来のありたい姿と強く紐づけたうえで，各自が自分でテーマを設定し，プロジェクトを立ち上げることを実践しました。

3 か月を経て，各参加者からは，「服のリユース（古着回収→片親世帯への寄付）を通して，誰もがファッションを楽しめる世界を実現するプロジェクト」，「多角的な視点からニュースを分析するサイトを作り，バイアスのかかった情報を減らすプロジェクト」，「ヴィーガンを実践し啓蒙して脱・動物搾取を目指すプロジェクト」，「家庭内での家事負担の意識のズレを可視化して女性が働きやすい社会を作るプロジェクト」など，自分の興味関心・IKIGAI を育てて，そこから探究の種をみつけてプロジェクトにしてくれました。3 か月という長期間，全国の仲間とともに探究にじっくり向き合えたこと，世界の最前線で戦うゲストとの交流によってより深く＆実践的な探究が多数出てきました。

＜参考資料＞





3. 活動参加者の次世代リーダーになるべくフォローアップ

この活動に参加した生徒の起業や事業化の手伝いを多くの場所で展開しました。一部，ご紹介となりますが，以下のような生徒が活発に活動しています。起業やクラウドファンディング，海外との連携パートナー開拓など，個別の活動に合わせて，世界中のネットワークを駆使して，提供しています。一部記事になったものなどをこちらでシェアさせていただきます。

＜宮崎県飯野高校　イエメン支援プロジェクト＞

https://readyfor.jp/projects/67122

コーヒー豆販売利益寄付目指す 飯野高生イエメン支援

2021年9月25日

高校生が発展途上国を支援―。えびの市・飯野高（長谷川岳洋校長）の１～３年生計６人が、飢餓に苦しむイエメンの子どもの写真をきっかけに、同国を支援しようと動き始めている。クラウドファンディングを活用してイエメン産コーヒー豆を販売することで、同国の産業振興につなげたい考え。発起人の３年生、塚本修三さん（１８）は「世界中から飢えに苦しむ子どもをなくすため、自分たちの行動が少しでも役に立てれば」と力を込める。

https://news.yahoo.co.jp/articles/333daa1c0e0cb871d9dd2eac8ea9686b7517a4ff

＜立命館宇治高校　もったい苗プロジェクト＞

立命館宇治高校　福田奈津実　田中愛乃｜廃棄苗（もったい苗）を活用したハンズオン学習の事業展開で注目の若手起業家

https://sogyotecho.jp/news/rittsumeikanujihighscool_interview/

（取締役副社長　中村 寛大・CFO 上原 丈弥）

Online! Global Leadership Studies in Laos

事業協働機関　アイ・シー・ネット株式会社

実施期間 2022 年 1 月 6 日－1 月 23 日

ワールド・ワイド・ラーニング（WWL ）コンソーシアム構築支援事業の一環として実施されたオンライン海外研修に、 WWL 連携機関として協力しました。コロナ禍でラオスに、実際に渡航ができなくなってから、オンライン渡航の形での研修は今回で 3 回目の実施でした。今回も立命館宇治高等学校が主体となり、ラオスをテーマとする 2 つのプロジェクトチームの活動を紹介しながら、プロジェクトに関連する人々、フィールドを訪問し、様々な活動を行いました。

1 参加者および参加人数

参加校　明石工業高等専門学校・大妻中野高等学校・福岡雙葉高等学校・宮崎県立飯野高等学校、宮崎県立宮崎大宮高等学校、立命館宇治高等学校（五十音順）

参加数　生徒 23 名

2 使用ソフト・オンラインツール

現地とは Zoom で接続して研修を実施しました。

参加者への連絡事項や振り返りや感想、発言できなかったことなどの共有にチャットツールの「Slack」を使用しました。 https://slack.com/intl/ja-jp/

現地高校生との交流でクイズ・アンケートソフトの「Kahoot」を使用しました。 https://kahoot.com/

3 プロジェクトチームとプロジェクトの概要

【WAKKA（教育支援）】

･現地の高校生の生活・教育支援をしている NGO と協力しながら経済的な側面からラオスの教育の向上に貢献。

･昨年に続き、今年度も現地の高校生のための生活・教育資金をクラウドファンディングで調達。当初の目標を上回る支援金を集めることに成功！

参考： WAKKA ～ 立命館宇治高等学校の生徒によるラオスの教育支援プロジェクト 2021 ～
https://campfire.jp/projects/516335/

【LAONIN（経済発展・教育支援）】

･日本のフェアトレード会社と連携し、ラオスのオーガニックコーヒーを地域の焙煎士、珈琲店の協力を得ながら販売。

・ラオスの現状を知ってもらおうと昨年 11 月に通信販売のサイトを立ち上げ、コーヒーの売り上げで得た利益を現地で学生寮を運営する日本の NGO に寄付。
・Wakka のクラウドファンディングにもコーヒーをリターン品として提供することにも協力。

4 研修の構成

1月6日・1月23日 事前研修・事後研修	・事前学習の発表、ラオス語を学ぶ ・学びを振り返り、今後のそれぞれの活動につなげる
海外研修DAY 1 市場探検、 現地高校生との交流	・ラオスの文化・生活を知るために、ラオス最大級の市場を探検 ・同世代のラオスの高校生と交流
海外研修DAY2 コーヒー産地訪問、 ビエンチャン視察	・コーヒー農園を訪問し、農家の話の聞くコーヒー栽培の過程を見たり、農家の話を聞く ・ラオスコーヒーや有機栽培についての想いを知る ・首都ビエンチャンとつないで、これまで見てきた農村部との違いを発見
海外研修DAY3 伝統工芸の村を訪問	・伝統工芸品がどのようにつくられ、彼らの生活に根付いているか理解する ・村の様子を見たり、ラオスの村の生活について知る

5 研修の様子

コーヒー農園を訪問

Jai Café の店長からラオスコーヒーに対する想いを聞く

伝統工芸の竹細工の村訪問し作業を見学

ビエンチャン視察

6 学びの結果

研修後のアンケート調査によると本研修の満足度は5点満点中4.9点と高く、参加者は本研修で得た学びや気づきを進展させることに意欲的です。また、研修の中で参加者同士の活動、振り返り、疑問点などの共有を通して刺激されたという参加者も多く、相乗効果を生み出すことができました。それぞれの意欲がさらなる学びや行動に繋がることを期待します。

以下、アンケートから参加者のコメント引用：

・ネットの情報や画像、自分の想像で判断せず現地の人の声を聴くことを心がけたいです。

・国際関係学を学ぶ際に、ローカルな目線から考えられるようにしたいです。

・外国語を学ぶ立場として、失敗してもいいから相手に伝える姿勢を大切にしたい。

・自分の価値観や途上国の現状、現地の方々の声を知り今後の進路や活動に対する意欲が湧きました。また同年代の活動を知ることが出来たのも刺激になりました。

・自分が疑問に思っていることや参加者の皆さんが疑問に思っていたことを知ることが出来て良かったです。

・大学でも東南アジアの教育支援をしていきたいなと思いました。

以下、Slackの振り返りから参加者のコメント引用：

・多くの人が本研修を通じて、何かアクションを起こそうという気持ちになったという話を聞いて、地球社会の未来は明るいと感じました。是非、皆さんと今後もつながっていきたいです。

・同じグループの人が発表の中で日本に興味がある坂雲寮の人達を日本に渡航させたいと言っていた事が自分のなかでは1番印象に残りました。日本の人達が海外に行くだけではなく、発展途上国の人達も海外に行ける機会を作る事はとても素敵な事だと思いました。

・それぞれの学校で立命館宇治で言うとラオニンのような活動をしている人が多くいてとても興味深かったし面白かったです。ぜひ、学校同士でこのような企画をやってみたいなと思います。

・ラオニンやワッカの方々の活動はすごく刺激になり自分でもアクションを起こしてみたいと思いました。日本とラオスのコラボレーションや、ラオニンのような販売などを妻中でもメンバーを集めて行えたら良いと思いました。今後ぜひ他校とのコラボが実現したら嬉しいです。

（グローバル教育チーム　岡崎夏）

世界で活躍する大人からのインスピレーションをヒントに自分の未来像や価値観を共有し，学び合う ～FOCUS WEEK での Inspire High の取り組みについて～

事業協働機関　株式会社 Inspire High

「全国高校生 SR サミット FOCUS 2021」にて，世界中の創造力と 10 代をつなぐオンラインプログラム「Inspire High」を活用したセッションを実施いたしました。

実施目的：

・世界中で第一線で活躍する大人から自分たちのプロジェクトに役立つインスピレーションをもらう。

・同じ問いを参加者同士で考え，お互いのことを深く知るきっかけをつくる。

実施したプログラム内容：

○ 7 月 14 日（水）20:00～21:00

「アフガニスタンの学校創立者と考える，学校の意味ってなんだろう？」

アフガニスタンで初めての女性のための学校を創設したシャバナ・バシージ=ラサさんへのインタビュー動画を見て，参加者同士で一緒に学校の意味，自分が人生で成し遂げたいことを考えました。具体的には，Slack に自分の自伝があるとしたときのタイトルとあらすじを投稿してもらいました。参考 1 が実際の投稿です。全国中からの参加者の未来が共有され，お互いの夢を知り，刺激し合う時間となりました。

○ 7 月 21 日（水）20:00～21:00

「マサイ族長老と考える，アイデンティティってなんだろう？」

マサイ族としての誇りを保ちながらも時代にあわなくなってしまった慣習をアップデートしているエマニュエル・マンクラさんへのインタビュー動画を見て，自分が大事にし続けたい価値観を振り返りました。

動画の中では「差別をなくすにはどうしたらいいか？」「自分を好きになるためにはどうすればいいか？」など 10 代が疑問に持つことにもエマニュエルさんがメッセージをくださっており，その内容が響いた様子が感想に書かれていました。（参考 2）

実施をしてみて：

<u>運営面に関して</u>

今回は Inspire High のプラットフォームを使わずに，Slack でアウトプットやフィードバックをしてもらいました。通常の Inspire High とは実施方法が異なるため，どうなるかと心配もありましたが，以下に生徒のみなさんの感想を掲載している通り，かなり意欲的に取り組んでいただきました。オンラインのよいところは，地理的な制約を解放できることです。コロナ下であることを逆手にとり，オンラインの力で世界とつながる体験を提供できたのではないかと思います。この場を設定いただいた先生方，誠に

ありがとうございました。

生徒の方々の反応について

WWL の FOCUS に参加していた生徒のみなさんからは，自分から積極的に何でも吸収しようとする姿勢，参加者同士で共に学び合う熱量を感じました。自分に近い夢や価値観を持つ人には共感の声をかけ，自分と異なる人にも「考えたこともなかった」と相手をリスペクトするようなコミュニケーションが見られました。

また，広い視野を持って自分の未来を考えているところも特徴と感じました。お菓子やスポーツなど自分の興味分野を明確に持っているにもかかわらず，それだけ極めるのではなく，世界や社会に対して自分は何ができるのかを興味と掛け合わせて考えている姿が素晴らしいなと思っています。

そういった生徒の方々がいるのは，WWL での継続的なプログラム提供や参加校の先生方の声がけで培われた土壌があるからだと感じております。参加いただいた生徒のみなさんの将来が楽しみです。

参考画像 1

参考２　感想抜粋

「あなたが自分を愛さない限り人を愛することはできません」という言葉がとても印象に残りました。確かに自分のことを分かっていなければ相手のことを理解することなんてできないし，これは価値観を理解する上でも同じことが言えると思いました。だから，まずは自分とは何か，自分の価値観とは何かということを考えるようにしたいです。そして自分とは異なる価値観に出会うことや現状が変化していくことを恐れずに外へ外へと飛び出して行きたいです。
「人種差別は，私とあなたが引き起こしている。それをなくすには，まず相手を尊敬することからだ」という言葉が，すごく印象に残った。
おもしろかったです。「日本はあなたを待っている」という言葉に考えさせられました。 focus に参加して，自分と同じ興味を持っている人がたくさんいること実感している今，夢に向かって行動を起こそうと強く思えました
自分を好きになることに少し恥ずかしさを感じてしまう自分がいました。 でも，自分のことを１番よくわかっているのは自分です。そんな私が私を好きになってあげなくてどうするの？というふうに今回の話を聞いて思いました。自分を他人事のように考えるのでなく，まずは自分から自分を愛する。そして，誰かを愛する。また，社会問題を自分のこととして捉える。本当に素敵な考えで思わされることが多々ありました。 本当にありがとうございました！
私が特に心に残ったことがあります。それはエマニュエルさんに『人種差別を終えるにはどうすれば良いと思いますか？』という質問をしたことです。これに対してエマニュエルさんは「日本人は黒人達によって自分の生活が脅かされると思っている。だからこそ相手がなぜそんなことをするのか考えないといけない」と言っていました。それに対して，私は確かにそうだなと思いました。 日本人は黒人の方が悪いことをした時，そこだけをピックアップしてニュースなどにしてしまいます。そのせいで，日本人は黒人全員に悪い印象を持ってしまいます。 でもそれは違って，ちゃんと相手を知っていかないといけません。だからこそ自分はこれから人種差別を無くすためにも，初めから誤解して嫌な目で見るのではなく相手の文化・考え方を尊敬していきたいと思いました。
私はとても自己肯定感が低いです。褒められてもすぐ否定してしまい，自分に自信もありません。今回のエマニュエルさんのお話で，自分を愛すことができなければ他人も愛せないということが印象に残りました。自分は特別で，この世に私は私しかいないと考え，自分自身にも敬意を持ちたいと思いました。
自分が何者であるのか，という問いは難しさを感じましたが，自分の中にある価値観を大切にする，他人に寛容さを持つ，尊敬する等，何に対しても大切である考え方を学べてとても興味深いものでした。
自分が誰かを知ろうとすることが人種差別をなくす１歩になるという言葉がとても印象に残りました。いろんな価値観があってその価値観を理解し合うことが大事だと学べました。
自分の価値観を理解したり，自分のことを愛したり，まずは自分のことについてからじゃないと，相手を理解したり愛することはできないんだなって思いました。エマニュエルさんが，どうして相手を理解しようとしないの？信頼しようとしないの？と聞いていて，普段自分は，何で相手はしてくれないの？と思うことがよくあったけど，今日のお話を聞いて自分から積極的に勇敢に行くことが大切なんだと教えてもらいました。
自分の行動の根源を考えることが出来たことがよかった。また，アイデンティティに関しては争いの理由になっていたりと様々な問題があることは知っていたのでそこについての深い考えに触れられたことも良い経験になりました
他人を愛するためには，自分を愛さなければならない，というところに１番衝撃を受けました。今まで，自分を嫌いになったことがたくさんあったけど，このままでは大切な人を大切にできていないということに今気付かされました。いますぐに自分や自分の価値観を変えることは難しいけれども少しずつ自分にできることをやっていきたいです。

（代表取締役 杉浦太一）

一歩踏み出した，フィリピン・オンライン・スタディツアー

事業協働機関　認定 NPO 法人アクセス

心に深く刺さった，アンドレアさんの言葉

「人々の生の声を聴き，課題解決のため行動できるようになる」ことを目的としたフィリピン・オンライン・スタディツアー。2021 年度は，前年度の経験を踏まえ，パワーアップした内容で開催することができました。

5 校から参加した 13 名の高校生は，フィリピンの都市スラムと離島の農漁村をバーチャル訪問。スラムで育った女性からライフストーリーを聞いたり，農漁村の中学生とコロナ禍での暮らしについて話し合ったり，フェアトレード生産者の本音を聞かせてもらうといった体験をしました。

3 日目に話を聞かせてくれた都市スラム育ちの女性アンドレアさん（25 才）からは，アルコールや薬物の依存症を抱える家族とともに生きる苦労，貧困の中で NGO が果たす役割，自分を信じることの大切さなどを語ってもらいました。絶望の中から何度も立ち上がってきたアンドレアさんの言葉は，多くの生徒の心に深く刺さったようでした。

【前年度のプログラムとの違い】

	前年度	2021 年度
開催日数	6 日間	7 日間
扱ったテーマ	●コロナ ●都市貧困 ●フィリピンの大学生	●都市スラム ●農村での教育 ●フェアトレード
メンター	なし	各グループ 1 名
グループワーク	2 回のみ	毎日あり
アクション プラン発表会	なし	あり

フィリピンのフェアトレード商品の生産現場をバーチャル訪問

メンターたちと語り合う中で

今年度は，所属校が異なる生徒を同グループにする形で 4 グループに分け，1 日 1～2 回のブレークアウトセッションで話し合う時間を設けました。各グループには一人ずつ，高校生・大学院生・２０代社会人のメンターが参加し，対話をファシリテート。そのうち２名は，前年度の本プログラム参加者でした。

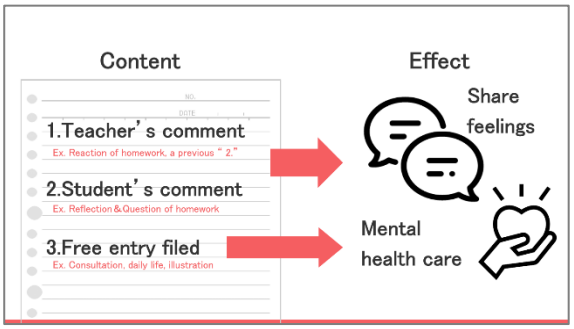
ブレークアウトセッションでは，バーチャル訪問で見聞きして感じたこと，疑問，深堀したいことなどを，メンターのサポートの下でざっくばらんに共有。頭の中を整理した上で，フィリピン側ゲストに対して質問を投げかけることで，対話を充実させようと試みました。

開始から数日間は，緊張や遠慮もあって口数が少なかった生徒たちでしたが，4 日目から少しずつ緊張がほぐれ，表情やリアクションも豊かになり，質問の数もどんどんと

増えていきました。生徒自身が２日目に設定した「コミュニケーション力を高める」「質問する力を身に着ける」「思ったことを素直に発言する」といった目標がどんどん達成されていっていることを感じました。

フィリピン現地のＮＧＯスタッフによるフィードバックを受けて

最終日は，５日目のアクションプラン作りで作成したプレゼンを英語で発表。フィリピン人の NGO スタッフからフィードバックをもらいました。「フェアトレード商品をレジン加工するアイデアは，とても面白い！ただ，素材を生かしたオーガニック製品であることを大切にしたい想いもあるので，今後の検討課題としたい」といった意見や，「高校生を対象に，フェアトレードの生産現場の様子を見てもらいつつ，フェアトレード商品づくり体験ワークショップを開催するという企画は今すぐにでも実現できそう」といったコメントが出ました。

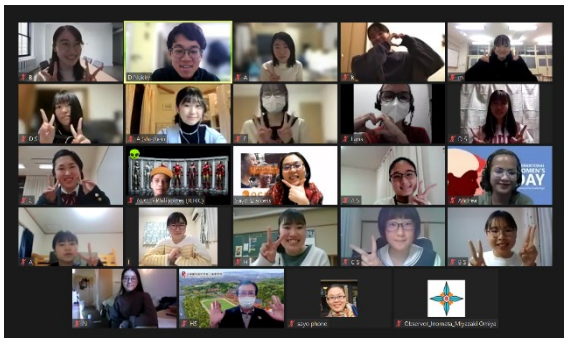


コロナ禍でコミュニケーションが不足するフィリピンの生徒と教員の関係性改善を提案したプランより

一部の生徒からは「アクションプランを実行に移したい」という声も挙がっています。今後，現場からの声を反映させながら，より実現性が高く現場のニーズに合ったプランへとブラッシュアップさせる動きを作っていけたらと考えています。

「小さくても一歩を踏み出す」を積み重ねて

全編英語でのやりとりということで，理解しきれなかったり，質問したくてもなかなか言葉にならなかったりした生徒もいたようです。それでも，一人ひとりが自分の目標に向かってチャレンジしていることを感じられた，とても充実した７日間でした。


都市スラムで育ちながら，NGO や教会のサポートを受けて夢をかなえたアンドレアさんと一緒に

プログラム終了後，ある生徒からこんなメッセージが届きました。「今回のオンライン・スタディツアーは，私が将来やりたいことの扉を開けてくれたような気がしました。行きたい学部もなりたい職業も決まっていないのですが，少しだけ自分のやりたいことを知れたように感じます。本当にありがとうございました！」

このプログラムが，生徒たちの中にあった「動き出したい」「挑戦したい」「変わりたい」といった想いを行動へとつなげるトリガーになれたのかもしれません。そんな風に一歩を踏み出す高校生たち，そして高校生を励まし一緒になって学んだメンターたちの姿に，たくさんのポジティブなエネルギーをもらいました。

（事務局長　野田沙良）

第６章

検　　証

データ分析

３年間のＷＷＬにおける学びを経験した生徒がどのように伸びたかについて，検証します。本校では，ＳＧＨ時代に利用していた独自指標*（本項末尾に全文掲載）を継続して用いるとともに，文部科学省がＳＧＨ時代から推奨している指標についてもデータをとりました。また，総合的な探究の時間（コア探究）については，研究開発学校としてスタートしているため，さらに，学びみらいＰＡＳＳ等の外部指標も取り入れ，さらに詳細に分析しています。それによると，将来に見通しを持てない生徒が大幅に減少し，リテラシーの大幅な上昇がみられましたが，コア探究にかかわる検証は，別冊にとりまとめています。

*事業連携機関株式会社タクトピアと開発

教員向けにも１月にアンケート調査を行いました。それによって，教員の意識について分析します。

＜独自指標＞

質問の詳細は，本項末尾に掲載していますが，概略は右表のようになります。

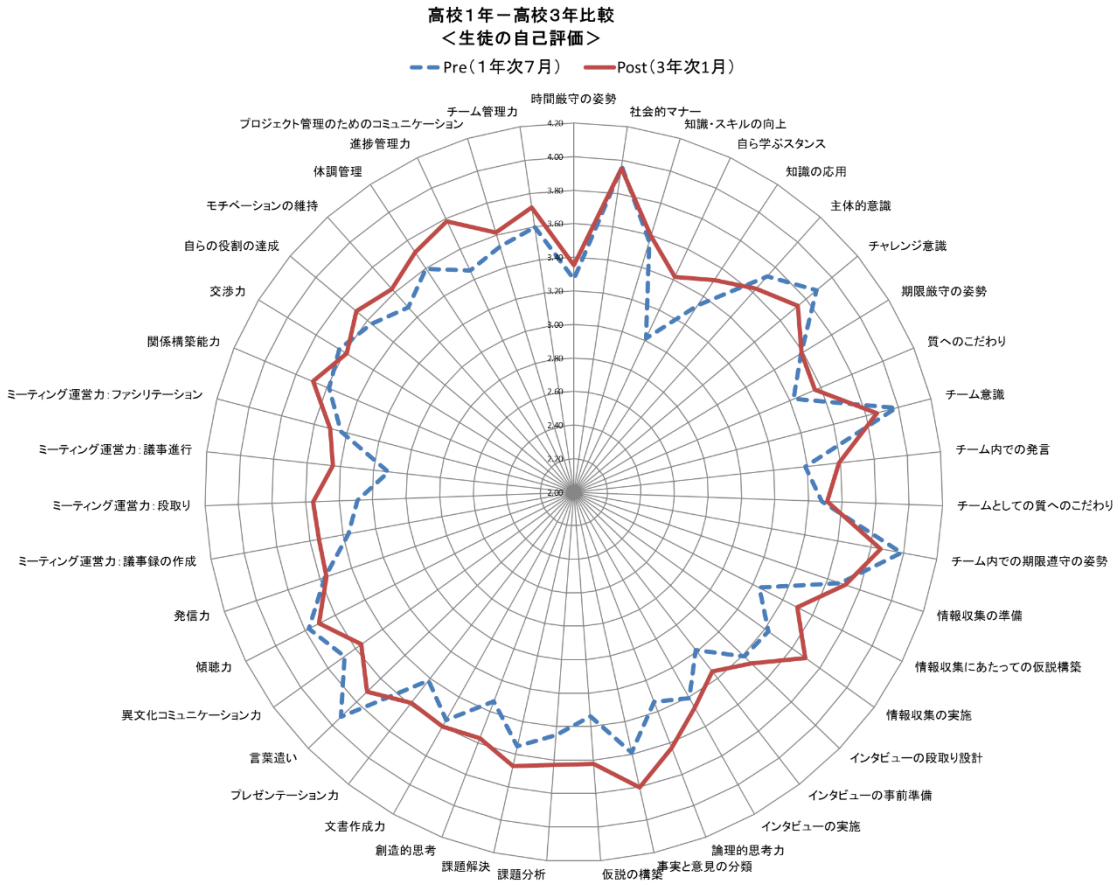
マインド	時間厳守の姿勢
	社会的マナー
	知識・スキルの向上
	自ら学ぶスタンス
	知識の応用
	主体的意識
	チャレンジ意識
	期限厳守の姿勢
	質へのこだわり
	チーム意識
	チーム内での発言
	チームとしての質へのこだわり
	チーム内での期限遵守の姿勢
スキル	情報収集の準備
	情報収集にあたっての仮説構築
	情報収集の実施
	インタビューの段取り設計
	インタビューの事前準備
	インタビューの実施
	論理的思考力
	事実と意見の分類
	仮説の構築
	課題分析
	課題解決
	創造的思考
	文書作成力
	プレゼンテーション力
	言葉遣い
	異文化コミュニケーション力
	傾聴力
	発信力
	ミーティング運営力：議事録の作成
	ミーティング運営力：段取り
	ミーティング運営力：議事進行
	ミーティング運営力：ファシリテーション
	関係構築能力
	交渉力
プロジェクトマネジメント	自らの役割の達成
	モチベーションの維持
	体調管理
	進捗管理力
	プロジェクト管理のためのコミュニケーション
	チーム管理力

本年度卒業生の高校１年段階及び高校３年段階の数値の比較をしたものが次ページ上のレーダーチャートです。赤実線が高校３年で，青破線が高校１年です。全体的に赤線が上回っていますが，一部青破線が上回っている項目があります。これらについては，入学時にすでに高い数値を示していた項目が大半のため，高止まりで変化していないか自己評価が成長に伴って厳しくなった可能性があります。

最も伸びている項目は，スキルの中でも思考力，次にスキルの情報収集力，次いでプロジェクトマネジメントとなりました。いいかえれば，リテラシーが伸びたといえます。

	1年	3年	増加率
A-1 マインド・自律	3.53	3.59	102
A-2 マインド・チームワーク	3.71	3.71	100
B-1 スキル・情報収集力	3.39	3.53	104
B-2 スキル・思考力	3.43	3.66	106
B-3 スキル・表現力	3.49	3.59	103
B-4 コラボレーション力	3.54	3.59	101
C プロジェクトマネジメント	3.54	3.69	104

細部を確認すると，最も伸びた項目が自ら学ぶスタンス，ミーティング運営力，次いで，進捗管理力，論理的思考力，仮説の構築，ミーティング運営力・段取り，情報収集の実施，情報収集にあたっての仮説構築などでした。



A-1-4	自ら学ぶスタンス	3.01	3.42	113	1
B-4-7	ミーティング運営力：議事進行	3.11	3.44	111	2
C-1-4	進捗管理力	3.46	3.78	109	3
B-2-1	論理的思考力	3.34	3.63	109	4
B-2-3	仮説の構築	3.34	3.62	109	5
B-4-6	ミーティング運営力：段取り	3.29	3.56	108	6
B-1-3	情報収集の実施	3.42	3.70	108	7
B-1-2	情報収集にあたっての仮説構築	3.24	3.50	108	8
B-2-6	創造的思考	3.33	3.57	107	9
A-2-2	チーム内での発言	3.39	3.59	106	10
B-2-2	事実と意見の分類	3.59	3.80	106	11
A-1-5	知識の応用	3.34	3.52	105	12
B-4-5	ミーティング運営力：議事録の作成	3.37	3.55	105	13
B-2-4	課題分析	3.45	3.63	105	14
B-1-5	インタビューの事前準備	3.19	3.35	105	15
B-3-2	プレゼンテーション力	3.42	3.58	105	16
C-1-2	モチベーションの維持	3.48	3.63	104	17
A-1-9	質へのこだわり	3.42	3.56	104	18
B-2-5	課題解決	3.55	3.67	103	19
C-1-6	チーム管理力	3.60	3.72	103	20
C-1-1	自らの役割の達成	3.57	3.69	103	21
C-1-3	体調管理	3.60	3.71	103	22

B-4-9	関係構築能力	3.58	3.69	103	23
A-1-1	時間厳守の姿勢	3.27	3.35	103	24
C-1-5	プロジェクト管理のためのコミュニケーション	3.53	3.62	102	25
B-1-6	インタビューの実施	3.41	3.47	102	26
B-4-8	ミーティング運営力：ファシリテーション	3.44	3.50	102	27
B-1-4	インタビューの段取り設計	3.41	3.47	102	28
B-3-1	文書作成力	3.56	3.60	101	29
A-1-3	知識・スキルの向上	3.56	3.60	101	30
B-1-1	情報収集の準備	3.68	3.71	101	31
A-2-3	チームとしての質へのこだわり	3.48	3.51	101	32
A-1-8	期限厳守の姿勢	3.58	3.59	100	33
A-1-2	社会的マナー	3.96	3.95	100	34
B-4-4	発信力	3.57	3.56	100	35
B-4-10	交渉力	3.64	3.59	99	36
B-4-3	傾聴力	3.77	3.71	98	37
A-1-6	主体的意識	3.73	3.63	97	38
A-2-1	チーム意識	3.99	3.87	97	39
A-2-4	チーム内での期限遵守の姿勢	3.99	3.86	97	40
B-4-2	異文化コミュニケーション力	3.68	3.56	97	41
A-1-7	チャレンジ意識	3.88	3.74	96	42
B-4-1	言葉遣い	3.93	3.71	94	43

SGH 時代との比較

SGH については，IM コースを中心とした研究開発でしたので，WWL における IM コースとの比較をすることで，WWL の効果を確認します。

次ページのレーダーチャートにおいて

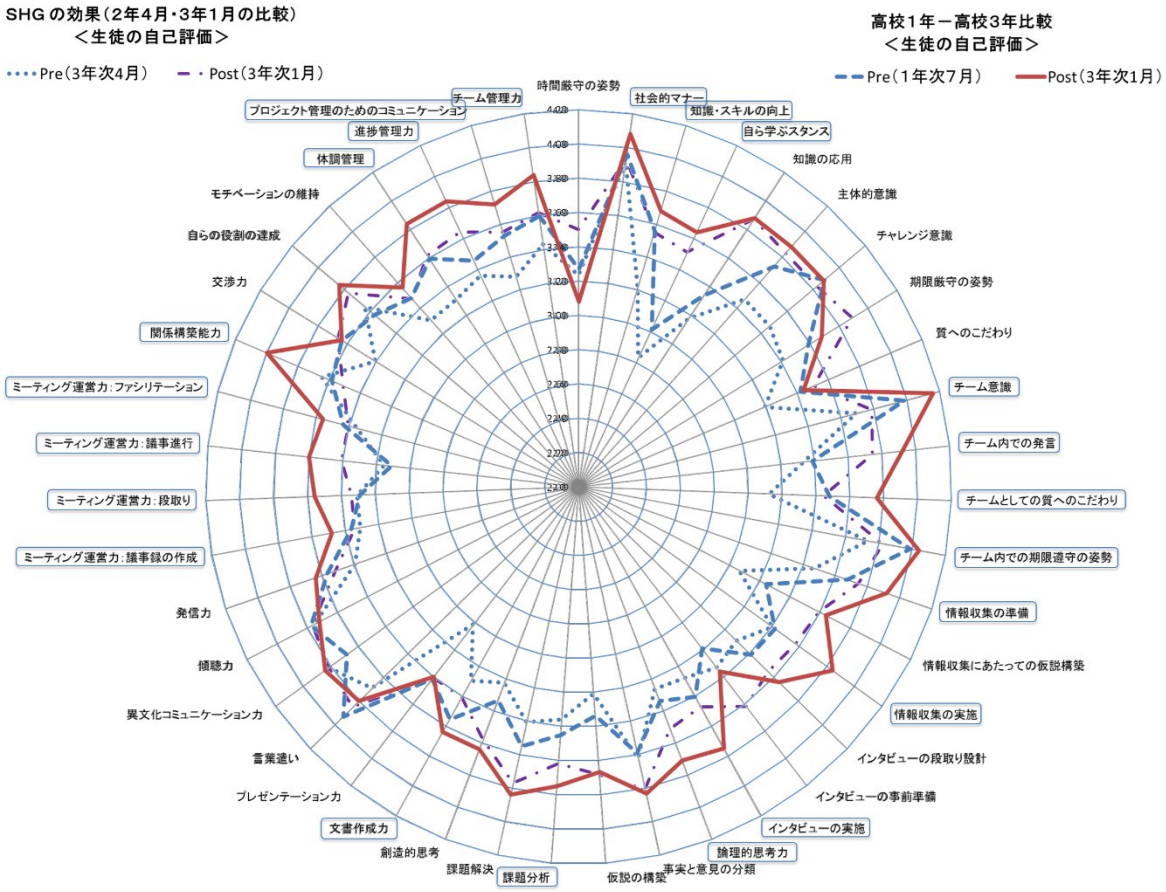
点線は SGH 時代 2018 年度 IM 卒業生留学帰国直後　**一点鎖線**がその卒業時

破線は WWL2019 年度入学生 1 年生，**実線**が 3 年生

を表しています。

入学時（WWL）と留学直後（SGH）においてのグラフの形は近似していますが，それぞれの卒業時のデータを比べると，以下のような特徴が読み取れます。

グラフ内項目に囲みをつけた部分が，SGH 時代を大幅に上回っている項目です。文書作成，情報収集，課題分析などのリテラシー部分のさらなる伸長とともに，ミーティングやチームでの活動にかかわる項目に伸びているものが多いことがわかります。これらは，探究の学びの定着と，WWL の特徴である社会や他校とつながっての活動の効果によると思われます。



＜文部科学省指標＞

文部科学省がひな型と示している指標（右表）についても，同様の調査を行いました。

全体および先行して様々なプログラムが充実していた IM コース単独でレーダーチャートにしたものが，次ページのグラフです。独自指標同様に 1 年生のグラフの形は似通っています。また，3 年のグラフは IM コースで全体より高い数値になっていますが，傾向は似ています。

コンピテンシー	相手の置かれた立場や気持ちを察することができる
	必要ならば、最初に決めたことを変えることができる
	自分と異なる立場の人の価値観を尊重できる
	複数の視点からの問題の原因を考える
	複数の選択肢を考える
	相手が意見を述べやすいように心がける
	相手との協力関係を築くように心がける
	反対意見にも耳を傾ける
	自分の得意な能力を活かす行動をとる
	自分の意見を効果的に述べて相手に説得する
	解決が進んでいるか、途中で確認する
	今回の出来事から、学んだことを振り返る
	解決に向けて強い熱意を持ち続ける
マインドセット	様々な外国に行ってみたい
	外国の様々な異文化に触れるのは楽しいことだと思う
	自分に自信がある
	自分の短所よりも長所に目を向けている
	自分は人のために役立つことができる人間だと思う
	集団での問題解決場面で、率先してリーダー的な役割を担うことができる
	議論の際、参加者それぞれの意見を聞くことができる
	自分のやりたいことを見つけ、それに情熱を傾けたい
	外国大学や大学院への留学（6ヶ月以上）も視野に入れて勉強したい
	海外ボランティアなどの国際的な活動に積極的に参加したい
	将来、外国で働くことも視野に入れて、職業を選択したい
探究型行動	基礎学力としての知識を持つ
	関心ある事柄について、その問題の本質を発見したり、原因を説明したりできる
	問題の重要度の根拠を見つけることができる
	生じる問題について、知識や経験を通して説明できる
	問題に影響を与える原因の候補をチームメンバーと一緒に検討して列挙し、まとめることができる
	問題の原因を挙げ、重要度をまとめることができる
	問題解決に向けて仮説を立てることができる
	問題解決に合ったデータや情報を選択できる
	集めたデータや情報の正確さがわかる
	作成した図表について、必要に合わせた使い方ができる
	分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる
	提案を適切にプレゼンテーションできる
	提案した内容がどこまで有効かについて説明できる
	自分の発表に対する質問に適切に回答できる

	1年	3年	増加率
コンピテンシー	4.44	4.71	106
マインド	4.41	4.52	103
探究型行動	4.10	4.57	111

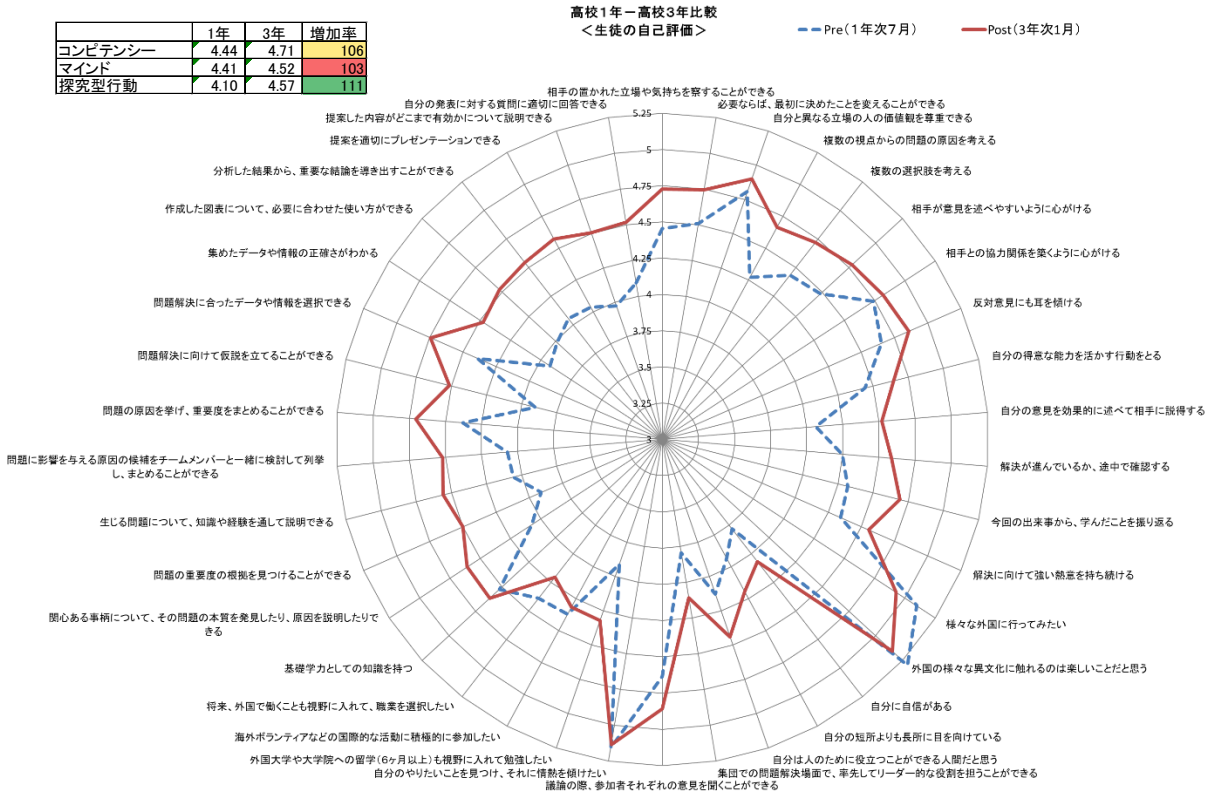


図　文部科学省指標　全体　１年と３年の比較

	1年	3年	増加率
コンピテンシー	4.74	5.05	107
マインドセット	4.93	4.90	99
探究型活動	4.26	4.81	113

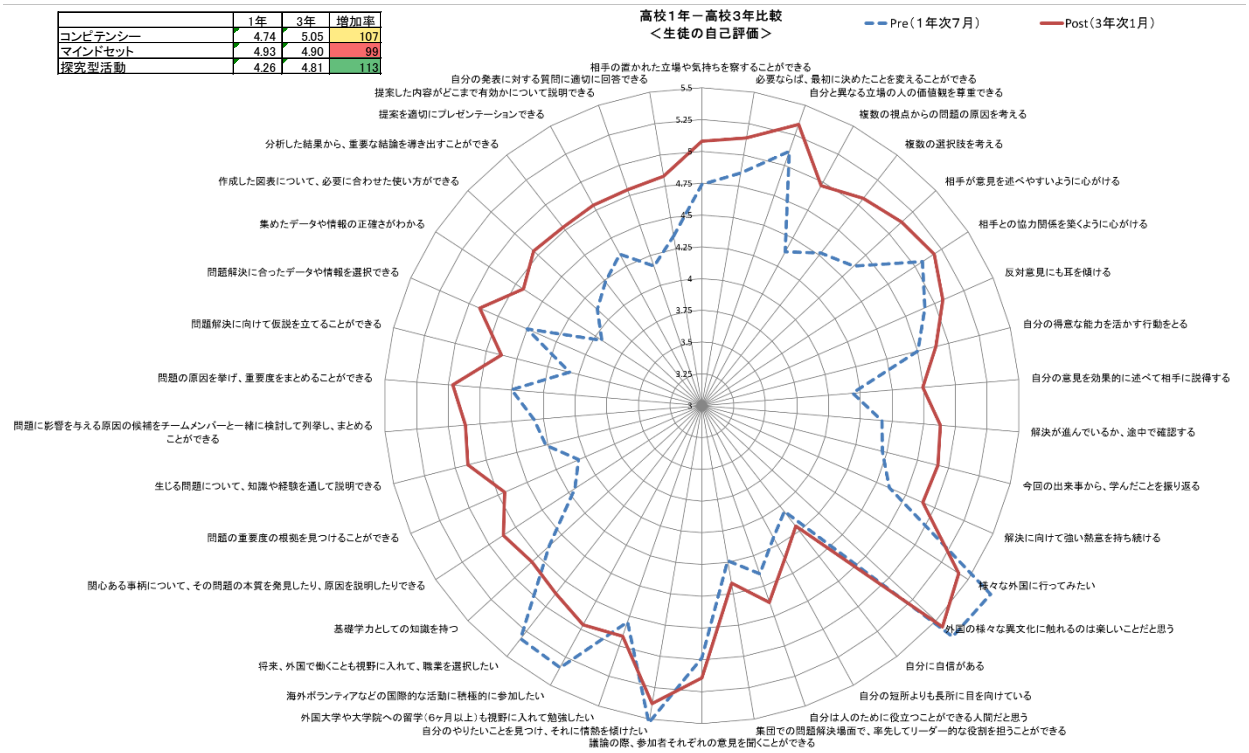


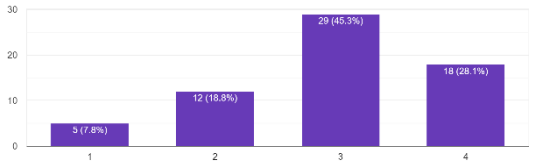
図　文部科学省指標　IM　１年と３年の比較

マインドセットの伸び率が低いのは，１年の時に高めに出ていたこと，コロナ禍で海外への渡航が制限されたこと，コロナ禍で日常的な海外との交流が少なかったことなどが原因と思われます。一方で，コンピテンシーや探究型活動の数値は大幅に伸びることとなりました。探究型学習，PBL 型プロジェクトなどが，学校全体に広がり，スキルを磨いてきたこと，社会や他校の生徒とつながる機会が増えたことなどの効果と思われます。

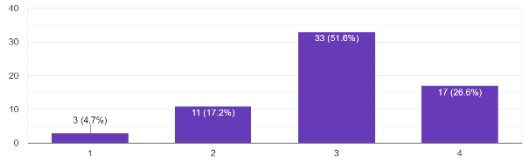
今後，WWＬの取り組みを継続発展させていく中で，特にチャートで落ち込んでいる部分の改善に向けては対応を検討していきたいと思います。

＜教員アンケート＞

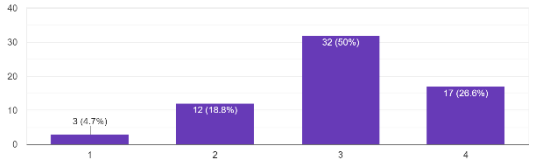
WWLの取り組みによる本校生徒への好影響を実感できましたか　Did you feel the positive impact of the WWL initiative on our students?



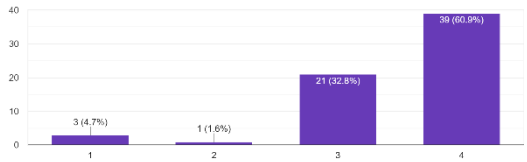
この3年間の取り組みによって、本校の探究学習は進んだと思われますか。Do you think that our school's inquiry-based learning has progressed as a result of these three years of activities?



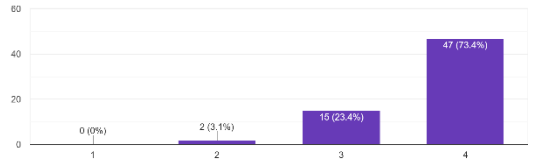
この3年間の取り組みによって、社会と生徒のかかわりが進んだと思われますか。Do you think that the school's efforts over the past three years hav...ed the relationship between students and society?



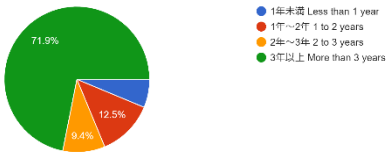
今後も探究学習を推進していくべきと思われますか。Do you think that inquiry-based learning should be promoted?



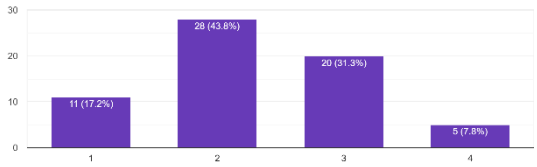
今後も生徒と社会とのかかわりを推進していくべきと思われますか。Do you think that we should promote the relationship between students and society?



本校でのご勤務年数　Years working at the school



総合評価として、WWLの取り組みが教員全体に広がったと思われますか。As an overall evaluation, do you think that the WWL initiative has spread to the entire teacher staff?



高校教員の約６割，高校担任の約６割が回答しました。

73％が生徒への好影響を実感，78%が探究学習や社会とのつながりが進んだと評価。ほぼ全員が，今後も探究学習や社会とのつながりを推進すべきと答えました。このことより，教員のなかでも，WWL の取り組みへの理解が，一定進んだことがわかります。教員への広がりについては，プロジェクトや探究系授業などにかかわる教員は広がったと感じていますが，そうでない教員には実感が薄い傾向にあります。コロナ禍で海外の来校がなかったことも要因と思われます。運営指導委員会での先生方の見解は，こ

れで十分教員に浸透しており，教員に浸透させる努力より，生徒に対しての取り組み強化に重点を置き，生徒の変容によって教員が徐々に気がついていけばよいとの見解をいただきました。

これらより，SGH 時代よりは全体に広がりましたが，生徒の変容などを共有する機会を今後工夫することが必要と思います。

自由記述欄の教員の意見（抜粋）

・各コースや分掌でのWWＬ関連の取り組みについてあまり共有されることがないからだと思います。
・探究授業等を担当した教員以外には広がっていないと感じるため
・直接具体的に関わる機会が少なかったため
・関わりたくないという先生もおられると思いますが，関わりたいが，どうやって関わったらいいかわからない人も多いと思います。
・現在までのところでWWＬに関して情報をシェアする機会が少ない。
・WWL was more inclusive of all the courses, the leadership of WWL was more diverse than, for example, SGHS.
・一部の教員の奮闘に負うところが大きいから。
・教員研修会などを開催して共有する機会を作る必要があったのでは
・１件担当したが，教員の負担が大きいと感じた。教員にも温度差が。
・As with all systems like this, WWL focused on a privileged few, not the bulk of the students
・No training provided for educators.
・取り組みが WWL とどのようにつながっているのかがあまり示されていないから。
・成果を発表する機会をきちんと設けることができていたから。
・Not all teachers were given the opportunity to be involved. In some cases, there may not have been an interest in being involved by teachers.
・時間が取れなかった
・多全体像を掴みづらくわりにくかったことも一因と思われます。
・文科探求の授業を担当しましたが，この２年間で新たに作り上げた授業のため，授業準備等に忙しく，ほかの先生方にリーチする暇がなかった。
・I can see things happening and read / hear about it from time to time. It is hard for me to know what is the result of WWL and what is simply the result of individual teacher excellence. Either way, it feels positive.
・どの取り組みが WWL の取り組みなのかがわかりづらかったから。
・情報共有が全校にできておらず，一部の教員の関わりに終始してためではないでしょうか
・一部の人のものになっているから。
・共有する機会が少ない。取り組みを２時間程度の生徒向け報告会，教員向け研修会などを設定して共有したほうが良いのではないか。
・もっと広く役割分担してもよいと思います。教員会議は早く終えるのが良いと思いません。生徒の活躍についてもっと共有する機会を持って良いのではないでしょうか。
・生徒の発表を見る機会が増えた
・コアの内容を共有していることが大きく影響しているのではないかと思います。
・生徒のとりくみに引っ張られる形で教員が動いたと思います。
・WWL did a good job of building sustainable programs, which the school failed to do during SGH. We clearly learned and improved from that experience and have made the school better through WWL. I hope that the school administration will find a way to continue to support these programs and doesn't let all of this progress go to waste.
More bilingal teacher workshops in school. Hoested by experienced staff. Simple.
・ここ２年間，新型コロナウイルスの影響で直接的な国際交流や海外研修を行えなかったため，その部分では国際化が進んだとは言い難いが，オンラインでの交流などこれまで考えられなかった方法も実践することができ，気軽な交流ができるようになったのでネットワークを活用して日常的・恒常的に海外とつながることができるようにしていきたい。

＜参考資料＞

独自指標

A. マインド

I. 自律心（全 9 問）

1）時間厳守の姿勢について ＊

1. 時間を守る意識がなく，遅刻が多い。
2. 時間を守ろうと心がけているが，遅刻してしまう。
3. 定められた時間を厳守できているが，時間に余裕を持った行動が出来ていない。
4. 定められた時間の 10 分前には行動が完了している。
5. 10 分前行動が常に出来るだけでなく，周囲にも時間厳守を徹底するよう働きかけている。

2）社会的マナーについて ＊

1. 場に応じた，挨拶・身だしなみ・振舞い等があることを知らない。
2. 場に応じた，マナー，挨拶・身だしなみ・振舞い等があることを理解しているが，まく振る舞うことが出来ない。
3. 場に応じた，マナー，挨拶・身だしなみ・振舞い等があることを理解し，周囲の助けがあれば適切に行動できる。
4. 場に応じたマナー，挨拶・身だしなみ・振舞い等があることを身につけており，自ら適切に行動できる。
5. 場に応じた挨拶・身だしなみ・振舞い等を理解し，適切に行動を取ることができるだけでなく，周囲にも適切な振る舞いをするよう，働きかけられている。

3）知識・スキルの向上について ＊

1. 課題に取り組む際に，必要な知識やスキルを自主的に身につけようとしていない。
2. 知識とスキルの向上が高い成果を出すことに繋がることを理解しているが，そのための行動が取れていない。
3. より高い成果を出すため，知識とスキル獲得の行動を取るようにこころがけている。
4. より高い成果を出すために，常に知識とスキル獲得の努力を行っている。
5. より高い価値を提供できるよう，自らの知識やスキルを高め，それを他者に教えることで，さらに自分の知識やスキルを高めている。

4）自ら学ぶスタンスについて ＊

1. 与えられた課題に取り組むことで精一杯だ。
2. 言われたことだけを学ぶのではなく，自ら学び取ろうという姿勢はあるが，そのための行動を取れていない。
3. 物事を教わらなくても，自ら学び取ろうという姿勢があり，時々，教わらなくても物事に気づくことがある
4. 人から物事を教えてもらうだけではなく，自ら学び取るという姿勢で常にプロジェクトに臨んでいる。
5. 人からを教えてもらうのではなく，自ら学び取るという姿勢でプロジェクトに臨み，そのことの大切さを周囲に伝えられている。

5）知識の応用について ＊

1. このプログラムで学んだことを日々の活動に適用しようという発想がない，もしくは研修から学んだことはない。
2. このプログラムで学んだことを日々の活動に応用する必要があると考えているものの，うまく実現できていない。
3. このプログラムで学んだことを日々の活動に応用することが時々出来ている。または，アドバイスが有れば出来る。
4. このプログラムで学んだことを，日々の活動に応用・適用しようとしている。
5. このプログラムで学んだことを，日々の活動に応用しようと行動し，周囲から高い評価を得られている。

6）主体意識について ＊

1. 自分なりの答え・行動をしようとは特に思わず，指示が来るまで行動を起こす必要はないと思っている。
2. 自分なりの行動・答えを出す必要があると考えているが，どうしていいかわからず，結果的に指示待ち状態になっている。
3. 自分なりの行動・答えを出そうと行動し，適切なアドバイスが有れば，主体的な行動が取れる。
4. 指示を待つだけではなく，自ら考え，求め，導き出し，自分なりの答えを出すことが出来る。
5. 指示を待つのではなく，自ら考え，自分なりの答えを出し，行動することが出来る。さらに周囲にも同様に自ら考えて行動するよう働きかけられている。

7）チャレンジ意識について ＊

1. 困難な状況では，問題を解決することを諦めてしまう。
2. 困難な状況に置かれた時に，解決のための行動を試みるが現状を打破できない。
3. 困難な状況においても，前向きに考え，アドバイスや周囲の助けがあれば，場を乗り切るために行動できる。
4. 困難な状況において，その場を乗り切るために，できることを自ら見出し行動に移すことができる。
5. 困難な状況でも，今できることを考え，その場を乗り切るために自ら行動するとともに，周囲に行動を促すことが出来る。

8）期限遵守の姿勢について ＊

1. 期限を設定せずに課題に取り組んでいる。
2. 自ら期限を設定するものの，それを守ることが出来ていない。
3. 自ら期限を設定するが，常にその期限を厳守出来ているわけではない。
4. 自らが定めた期限を常に厳守できている。
5. 期限を常に守り，周囲にも期限を守るように働きかけられている。

9）質へのこだわりについて ＊

1. 成果物の質にこだわりがない。
2. 妥協せずに最高の結果を出したいと考えているが，そのために必要な行動が伴っていない。
3. 周囲の助けを得るなどして，妥協せずに最高の結果を出せるように心がけている。
4. 常に妥協せずに最高の結果を出せるよう努めている。
5. 常に妥協せずに最高の結果を出せるよう努め，周囲の規範となると同時に，周囲にも質の向上を促している。

II. チームワーク（全 4 問）

1）チーム意識について ＊

1. チームのことを考える余裕がない。
2. チームの一員としての行動が出来ず，チームに貢献が出来ていない。
3. チームメンバーとしての意識を持ち，アドバイスやサポートがあれば，チームに貢献できる。
4. 常にチームメンバーとしての意識を持ち，チーム全体の成果を上げられるよう，行動している。
5. 常にチームメンバーとしての意識を持ち，チーム全体の成果を上げられるよう行動し，成果を上げている。また，周囲にもチーム意識を持ち，チームとしての成果を上げるよう行動することを促している。

2) チーム内での発言について ＊
1. 自ら率先して行動することが少ない。
2. 意欲的・積極的に発言・行動したいと考えているが，実践出来ていない。
3. チーム内で意欲的かつ積極的に発言/行動し，チームに貢献したことがある。
4. 常にチーム内で意欲的かつ積極的に発言/行動し，チームに貢献している。
5. チーム内で意欲的かつ積極的に自らも発言/行動するとともに，周囲にも積極的な行動を促し，チームとしての成果を上げている。

3) チームとしての質へのこだわりについて（２年時） ＊
1. チームが高い質のアウトプットを持っていることも理解していないし，質を向上させようと努めてもいない。
2. チームが求めるアウトプットの質を理解しているが，質を向上させるための行動が出来ていない。
3. チームが求めるアウトプットの質を意識しており，自らも妥協せずに質の向上に務めたことがある。
4. チームが求めるアウトプットの質を常に意識し，常に妥協せずに質の向上に努めている。
5. チームに求められるアウトプットの質を常に意識し，質の向上に努め，チームとして高い成果を出している。

4) チーム内での期限遵守の姿勢について ＊
1. チームの定めた締切を守ることが出来ない。
2. チームの定めた締切があることは理解しているが，それを守るための行動ができず，期限が守れない。
3. 周囲の助けを得られれば，チームによって定められた，自分の担当に対する締切を守ることが出来る。
4. チームによって定められた，自分の担当に対する締切を常に守っている。
5. チームによって定められた，自分の担当に対する締切を守り，周囲にも期限を守るよう働きかけている

B．スキル

I．情報収集力（全６問）

1) 情報収集の準備について ＊
1. リサーチの目的が分からず作業していることがある。
2. リサーチの目的にあった段取りや方法を定義する必要を理解しているが，実践出来ていない。
3. 周囲の助けを得られれば，リサーチの目的を理解し，目的に合わせ，効率的に作業するための段取りを組むことが出来る。
4. リサーチの目的を理解し，目的に合わせて効率的に作業するための段取りを組むことが出来る。
5. リサーチの目的を理解し，目的に合わせて効率的に作業するための段取りを組むことが出来，周囲が段取りを組むのを手伝うことができる。

2) 情報収集にあたっての仮説構築について ＊
1. 情報収集が必要なときには思いつくところから着手している。
2. 情報を収集する前に，仮説を構築する必要性を理解しているが，実践出来ていない。
3. 周囲の助けを得られれば，仮説を立ててから情報収集をすることが出来る。
4. 常に情報を収集する前に，仮説を構築することが出来る。
5. 情報を収集する前に，仮説を立てることが出来，周囲の手助けが出来ている。

3) 情報収集の実施 ＊
1. 仮説検証の際には適切な情報源を選ぶべきであることを理解出来ていない。
2. 様々な情報源の特徴と使い方が異なることを理解しているが，情報収集時にその知識を活用出来ていない。
3. 様々な情報源の特徴と使い方を理解し，周囲の助けを得るなどして仮説検証に必要な情報を効率的に収集出来たことがある。
4. 様々な情報源の特徴と使い方を理解し，仮説に合わせた情報を効率的に収集することが出来る。
5. 様々な情報源の特徴と使い方を理解し，仮説に合わせた情報を効率的に収集することができ，周囲の手助けを行うことが出来る。

4) インタビューの段取りの設計について ＊
1. インタビューの目的を理解せずに作業していることがある。
2. インタビューの目的を理解し，それを実現するための段取りを組む必要性を理解しているが，実践出来ていない。
3. インタビューの目的を理解した上で，周囲の助けを得ながら，効率的に作業するための段取りを組んだことがある。
4. インタビューの目的を元に，効率的に実施するための段取りを独力で組むことが出来る。
5. インタビューの目的を理解し，効率的に作業するための段取りを組むことが出来，周囲にもその方法を教えることが出来る。

5) インタビューの事前準備 ＊
1. インタビューシートを作成したことがない。
2. インタビューシートの必要性を理解しているが，実践出来ていない。
3. 周囲の助けを得られれば，インタビューシートを作成することが出来る。
4. インタビューシートを独力で作成することができる。
5. インタビューシートを作成することが出来，周囲にも作成方法を教えることが出来る。

6) インタビューの実施について ＊
1. インタビュー実施時は用意した質問を聞くことで精一杯だ。
2. インタビュー時に，相手の反応を見ながら話さなくてはいけないということを理解しているが，実践出来ていない。
3. インタビュー時に，周囲の助けを得るなどして，相手の反応を観察しながら，疑問を残さず必要な情報を引き出したことがある。
4. 相手の反応を観察しながら，疑問を残さず必要な情報を引き出すことが出来る。
5. インタビュー時は常に，相手の反応を観察しながら，疑問を残さず必要な情報を引き出すことができ，周囲にもその方法を教えることが出来る。

II. 思考力（全6問）

1）論理的思考について ＊

1. 論理を組み立て，結論を述べるにはどうすればよいか分からない。
2. 論理を組み立て，結論を明確にする必要性があるのは理解しているが，実践出来ていない。
3. 周囲の助けを得られれば，筋道の通った論理を組み立て，結論を明確に導き出すことが出来る。
4. 筋道の通った論理を組み立て，常に結論を明確に述べることができる。
5. 筋道の通った論理を組み立て，結論を明確に述べることができ，さらに他者にも論理を持って話せるよう，教えることが出来る。

2）事実と意見の分類について ＊

1. 事実と意見の違いが理解出来ない。
2. 事実と意見の違いを理解しているが，数多くの情報から客観的な事実を抽出することが出来ない。
3. 周囲の助けを得られれば，事実と意見の違いを理解し，客観的な事実を抽出することが出来る。
4. 事実と意見の違いを理解し，数多くの情報の中から，客観的な事実を抽出することが出来る。
5. 事実と意見の違いを理解し，数多くの情報の中から，客観的な事実を抽出することができ，さらにその方法を周囲にも教えることが出来る。

3）仮説の構築について ＊

1. 仮説を構築するということが理解出来ない。
2. 仮説を構築する必要性を理解しているものの，客観的な事実をもとに構築出来ない。
3. 周囲の助けを得られれば，客観的な事実をもとに仮説を構築することが出来る。
4. 客観的な事実をもとに，独力で仮説を構築することが出来る。
5. 客観的な事実をもとに仮説を構築することが出来，周囲にもその方法について教える事が出来る。

4）課題分析について ＊

1. 問題発生時には実際に起きている問題の対処で精一杯だ。
2. 問題発生時には，根本的な原因追求の必要があることを理解しているが，実践出来ていない。
3. 問題発生時には，周囲の助けを得るなどして，根本的な原因を追求し，明確に説明出来る。
4. 問題発生時には，独力で根本的な原因を追求し，それを明確に説明することが出来る。
5. 問題発生時には，根本的な原因を追求し，それ明確に説明することが出来，その方法を周囲に教えることが出来る。

5）課題解決について ＊

1. 課題の解決策を考える事が出来ない。
2. 問題に直面した時に，その解決策を考えてみるが，有効なアイデアが得られたことがない。
3. 周囲の助けを得られれば，有効かつ実現可能な解決策を考案することが出来る。
4. 課題に対し，有効かつ実現可能な解決策を独力で考案することが出来る。
5. 課題に対し，有効かつ実現可能な解決策を考案することが出来，周囲にも課題解決策構築について教えることが出来る。

6）創造的思考について ＊

1. 作業やアイデアに行き詰った時に，諦めてしまい，それ以上考え，行動をすることが出来ない。
2. プロジェクトが行きづまったとき，代替案を探す必要性は理解しているが，うまく探すことが出来ない。
3. プロジェクトが行きづまったときに，周囲の助けを得るなどして，新たな視点をもって代替案を探しだしたことがある。
4. プロジェクトが行きづまったときに，独力で代替案を探しだすことが出来る。
5. プロジェクトが行き詰ったときに，新たな視点をもって代替案を提案し，周囲にも受け入れられている。

III. 表現力（全2問）

1）文書作成力について ＊

1. 文書を作成する際には，自分の作りたい様に作っている。
2. 聞き手に分かりやすい資料を作成しようとしているが，意図が伝わる資料を作ることが出来ない。
3. 周囲の助けを得られれば，聞き手に分かりやすい資料を作成ることが出来る。
4. 常に聞き手に分かりやすい資料を作成することが出来る。
5. 聞き手に分かりやすい資料を作成することができ，周囲にも資料の作成方法を教えることが出来る。

2）プレゼンテーション力について ＊

1. プレゼンテーションで自分の伝えたいことを上手く伝えることが出来ない。
2. 分かりやすいプレゼンテーションを実施したいと考えているが，実践出来ない。
3. 周囲の助けを得られれば，説得力があり分かりやすいプレゼンテーションを実施することが出来る。
4. 常に説得力があり分かりやすいプレゼンテーションを独力で行うことが出来る。
5. 常に説得力があり分かりやすいプレゼンテーションを実施することができ，周囲から評価されている。

IV. コラボレーション力（全10問）

1）言葉遣いについて ＊

1. 言葉遣いや文章を状況に応じて使い分けていない。
2. 状況に応じた，正しい話し言葉/書き言葉があることを理解しているが，適切に使うことが出来ない。
3. 周囲の助けを得られれば，状況に応じた，正しい話し言葉/書き言葉を使うことが出来る。
4. 常に状況に応じた，正しい話し言葉/書き言葉を使うことが出来る。
5. 状況に応じた正しい話し言葉/書き言葉を使うことができ，周囲にも言葉遣いについて教えることが出来る。

2）異文化コミュニケーション力について ＊

1. 年齢や国籍の異なる相手と上手くコミュニケーションを取ることが出来ない。
2. 年齢や国籍の異なる相手とコミュニケーションを取るよう努めているが，実践出来ていない。
3. 周囲の助けを得られれば，年齢や国籍の異なる相手とも，適切にコミュニケーションを取ることが出来る。
4. 年齢や国籍の異なる相手とも，適切にコミュニケーションをとることが出来る。
5. 年齢や国籍の異なる相手とも，適切にコミュニケーションをとることが出来，周囲にもそう出来るよう促している。

3）傾聴力について ＊

1. 相手の話に耳を傾けることが出来ない。
2. 相手の話を熱心に聞く必要性を理解しているものの，相手が積極的に話せるような場を作れず，相手の言いたいことを引き出すことが出来ない。
3. 周囲の助けを得られれば，相手の話を熱心に聞き，相手の言いたいことを引き出すことが出来る。
4. 相手の話を熱心に聞き，相手の言いたいことを引き出すことが出来る。
5. 相手の話を熱心に聞き，相手の言いたいことを引き出すことができ，さらに周囲にもその工夫を教えることができる。

4) 発信力について ＊
1. 自分が普段一緒にいる人以外にも，自分の考えを端的に伝えることができる。
2. 自分が普段一緒にいる人以外にも，自分の考えを端的に伝えることができる。
3. 自分が普段一緒にいる人以外にも，自分の考えを端的に伝えることができる。
4. 自分が普段一緒にいる人以外にも，自分の考えを常に端的に伝えることができる。
5. 自分が普段一緒にいる人以外にも，自分の考えを端的に伝えることができ，そうする方法についても周囲に教えている。

5) ミーティング運営力：議事録作成について ＊
1. 議事録作成の重要性を理解していない。
2. ミーティングでは記録をとっているが，要点をおさえた簡潔でわかりやすい議事録を作成出来ない。
3. 周囲の助けを得られれば，要点を押さえた記録をとり，適切な文章表現を用いた簡潔明瞭な議事録を作成出来る。
4. ミーティングでは要点を押さえた記録をとり，その後適切な文章表現を用いた簡潔明瞭な議事録を作成することが出来る。
5. ミーティングでは要点を押さえた記録をとり，その後適切な文章表現を用いた簡潔明瞭な議事録を作成でき，さらに，周囲にも教えることが出来る。

6) ミーティング運営力：段取りについて ＊
1. ミーティングの目的によって段取りを適切に組む必要があるということが理解出来ていない。
2. ミーティングの目的に合わせた段取りの必要性を理解しているが，実践出来ていない。
3. 周囲の助けを得られれば，ミーティングの段取りを適切に組み，準備や議事進行，フォローアップを適切に行うことが出来る。
4. ミーティングの目的に応じて，段取りを組み，準備や議事進行，フォローアップを適切に行うことが出来る。
5. ミーティングの目的に応じて段取りを組み，適切に準備や議事進行，フォローアップを適切に行なえ，さらに周囲にもそのことを教えることが出来る。

7) ミーティング運営力：議事進行について ＊
1. 会議は成り行きに任せて行っている。
2. 議事進行のために必要な考え方や手段を理解しているが，実践出来ていない。
3. 周囲の助けを得られれば，議論を活発化あるいは収束させる方法を用いて，議事進行することが出来る。
4. 議論を活発化あるいは収束させる方法を用いて，独力で議事進行することが出来る。
5. 議論を活発化あるいは収束させる方法を理解し，議事進行することが出来，そのことを周囲に教えることが出来る。

8) ミーティング運営力：ファシリテーションについて ＊
1. 会議参加者の発言や参加を促すことを留意したことがない。
2. 参加者が合意をしやすく，互いに理解し合えるようサポートする必要があると理解しているが，実践出来ていない。
3. 周囲の助けを得られれば，ミーティングでは，参加者の発言や参加を促したり，話の流れを整理したり，参加者の認識の一致を確認するなどして，参加者が合意をしやすく，互いに理解し合えるようサポートすることが出来る。
4. ミーティングでは，参加者の発言や参加を促したり，話の流れを整理したり，認識の一致を確認したりして，参加者が合意をしやすく，互いに理解し合えるようサポートすることが出来る。
5. ミーティングでは，参加者が合意をしやすく，互いに理解し合えるようサポートすることが出来，周囲にも同様の振る舞いを促している。

9) 関係構築力について ＊
1. チーム作業で他人のことを思い量る余裕がない。
2. チームや関係者と良好な関係・信頼関係を構築する必要があると理解しているが，実践出来ていない。
3. 周囲の助けを得られれば，チームメンバー等の関係者の気持ちを思い量り，周囲から信頼や共感を得ることが出来る。
4. チームメンバー等の関係者の気持ちを思い量り，周囲から信頼や共感を得ることが出来る。
5. チームメンバー等の関係者の気持ちを思い量り，お互いに信頼関係を持って仕事をすることが出来るだけでなく，周囲にも同様の行動を促している。

10) 交渉力について ＊
1. 目的達成のために周囲との合意形成は必要ないと考えている。
2. 自分の目標を達成するために，議論や取引を通じ，相手の合意を得ようと心がけているが実践出来ていない。
3. 周囲の助けを得られれば，自分の目標を達成するために，議論や取引を通じ，相手の合意を得ることが出来る。
4. 利害関係の生じている中で，自分の目標を達成するために，議論や取引を通じ，相手の合意を得ることが出来る。
5. 自分の目標を達成するために，議論や取引を通じ，相手の合意を得ることが出来，さらにその交渉の方法について周囲に教えることが出来る。

C．プロジェクトマネジメント

I．自己管理力（全5問）

1) 自らの役割の達成 ＊
1. プロジェクトの目的を理解せずに作業している。
2. プロジェクトの目的/ゴール/背景を理解しても，自分が果たすべき役割と関連付けて作業を行うことが出来ない。
3. 周囲の助けを得られれば，プロジェクトの目的を理解し，それを自分が果たすべき役割・作業に落として行動することが出来る。
4. プロジェクトの目的を理解し，それを自分が果たすべき役割・作業に落として行動することが出来る。
5. プロジェクトの目的を理解し，それを自分が果たすべき役割・作業に落として行動することが出来，さらに周囲にも同様の振る舞いを促している。

2) モチベーション維持について ＊

1. ストレス解消方法が分からず，溜め込んでしまう。
2. モチベーションを維持するため，自分なりのストレスの解消方法を見出したいと考えているが，まだ見つかっていない。
3. 周囲の助けを得られれば，自分なりのストレスの解消方法を見出し，モチベーションを維持することが出来る。
4. 自分なりのストレスの解消方法を実践し，継続的にモチベーションを維持している。
5. 自分なりのストレスの解消方法を実践し，継続的にモチベーションを維持しているだけでなく，周囲にその方法を共有している。

3）体調管理について ＊

1. 作業するときには自分の体調は省みない。
2. 自分の体質や健康状態を把握しているが，高いパフォーマンスを維持するための体調管理方法は確立できていない。
3. 自分の体質や健康状態を把握しており，自分なりの体調管理方法を実践している。体調不良時は，速やかに報告して休養を取る方が，高いパフォーマンスを発揮することができるということを理解している。
4. 自分の体質や健康状態を把握しており，自分なりの体調管理方法を確立している。体調不良のまま我慢して仕事を続けるよりも，速やかに報告して休養を取る方が，結果的に高いパフォーマンスを発揮することができるということを理解している。
5. 自分の体質や健康状態を把握しており，自分なりの体調管理方法を確立し，休養を取ることが高いパフォーマンスに繋がるということを理解している。また，周囲が体調の悪い時は休養を促したり，体調管理方法を周囲に伝授したりしている。

4）進捗管理力 ＊

1. 自身の担当作業の進捗を管理出来ていない。
2. スケジュールや課題一覧を作成しても，それらを適切に使うことが出来ない。
3. 周囲の助けを得られれば，スケジュールや課題一覧を作成し，タスクと課題を管理することが出来る。
4. スケジュールや課題一覧を作成し，タスクと課題を管理することが出来る。また複数のタスク/課題の重要度/難易度/依存関係を考慮して優先順位を付けることが出来る。
5. スケジュールや課題一覧を活用してタスクと課題を管理することが出来る。複数のタスク/課題の重要度/難易度/依存関係を考慮して優先順位を付けることが出来，さらに周囲の手助けが出来る。

5）プロジェクト管理のためのコミュニケーションについて ＊

1. 報告・連絡・相談の区別がつかず，その必要性が分からない。
2. 適切な内容/タイミングの報告，連絡，相談の必要性を理解しているが，実践出来ていない。
3. 適切な内容/タイミングの報告，連絡，相談をしたことがある。
4. 常に適切な内容/タイミングの報告，連絡，相談が出来る。
5. 適切な内容/タイミングの報告，連絡，相談が出来，周囲にもそうするように促している。

6）チーム管理力について ＊

1. 他メンバーのパフォーマンスにまで気を配る余裕がない。
2. 他メンバーの著しいモチベーション低下や体調不良を配慮・報告の必要性は理解しているが，実践出来ていない。
3. 他メンバーの著しいモチベーション低下や体調不良に気付いた場合に，配慮・報告したことがある。
4. 他メンバーの著しいモチベーション低下や体調不良に気付いた場合は，常に配慮・報告することが出来る。
5. 他メンバーの著しいモチベーション低下や体調不良に気付いた場合は，配慮・報告することができ，周囲にもそうするように働きかけている。

運営指導委員会・検証委員会

2021 年度の運営指導委員会は，コア探究にかかわるものを 3 回，ネットワーク部門におけるものを１回開催しました。また，検証委員の先生方には，運営指導委員会に出席いただくとともに，個別にアドバイスをいただいてきました。委員の先生方は以下の方々です。

運営指導委員会

（敬称略・順不同）

二宮　晧　広島大学名誉教授
飯吉　透　京都大学 理事補（教育担当）・高等教育研究開発推進センター長・教授
　　兼任：大学院教育学研究科教授（高等教育開発論講座）
神居文彰　平等院 住職
川上全龍　妙心寺塔頭春光院副住職　慶応大学研究員　The Fellow of the U.S.-Japan Leadership Program by the U.S.-Japan Foundation
小関道幸　株式会社ソーシャルプロデューサー代表取締役会長
浮田恭子　宝塚大学看護学部准教授，元立命館小学校校長，元立命館宇治高等学校副校長
村井尚子　京都女子大学准教授
山下真司　リクルートキャリアガイダンス編集長
大森順子　大阪大学大学院大学院生，元百合学院進路指導部長
小村俊平　OECD日本イノベーション教育ネットワーク事務局長

検証委員会

（敬称略・順不同）

花田真吾　東洋大学国際学部グローバル・イノベーション学科准教授
影戸　誠　日本教育工学会国際担当理事、同国際交流委員長，日本福祉大学（客員教授）
河井　亨　立命館大学スポーツ健康科学部、教育開発支援機構教育･学修支援センター准教授

2021 年度　カリキュラム部会　第１回 WWL 運営指導委員会　6 月 25 日（金）　議事録

（配布資料） レジュメ，大学生によるパワーポイント

＜参加者（敬称略）＞

＊運営指導委員　村井・山下・小村・溝口・河井（大森先生はご欠席予定）

＊学内（学園内）　八木・酒井・山口・上杉・小笹（一貫教育部）・竹中（池坊短大教授。前一貫教育部）

１　委員メンバー近況報告（それぞれ）15 分　略

２　コア探究についての報告

(1)昨年度取り組み報告　（1 月に報告できていなかったこと）

①学びみらいＰＡＳＳに見る生徒の変容と成長（有意に差があるほどの成長あり）→探究で育つものが見えてきた。

コア探究を実施する１年前から継続して，学びみらい PASS を受けている。

将来の見通しについては，「見通しがない」と答えた生徒が減り，行動すべきことがわかっ

ている生徒が多くなった。リテラシー（思考・判断・）　全体的に伸びてきている。
コンピテンシー（学びに向かう力）が将来に向けて頑張る力。ここがコアの本質なのでは？

②大学生によるアセスメント実施

今年度は４人の学生が分析をしてくれた。そこでの成果としてあげられるのは，

㋐マイラーニングストーリーの評価表を使ってくれた。

㋑フィードバック，研究・仮説・考察などを分析してくれた。

㋒マイラーニングストーリーも具体的な行動計画，一貫性，動機，リフレクションと分野を分けて分析してくれていた。

㋓大学生の視点で何を求めるのかも考えてくれた！

→ここで活躍してくれた大学生と高大連携をしていきたい。

河井先生より総括

・学生の力量が大きく伸びた。
・教員はフィードバックしか言っていない。
・２年生で研究の手習いをする授業がある。（現３年生）
・これから発展していくことも可能。
・大学生は「すごい」を連呼していた。
・評価を行うことによって，学びについて深く理解できることができた。
・探究・マイラーニングストーリーに評価としてかかわることによって，学生が大きく成長できた。生徒同士でやりとりをすることによって，到達ゾーンを確認することができた。

(2)今年度の取り組み（年度当初作成の要約版）

１，カリキュラム開発

１－１　3 学年のカリキュラム定着（2020 年度完成させたものを実施）。
１－２　高３コア探究のプロジェクトを学びの集大成とするありかたの検討。
１－３　コア探究を核としたカリキュラムマネジメント。中高連携や土曜活用など含む。

２，具体的な取り組み

２－１　学びをアウトプットする場作り，場の開拓や拡大
・校内で全員が発表する会（学外公開）やマイプロジェクトアワード in 宇治の定着
・上記以外に各種コンクール，下級生への発表や指導，大学との連携など場の拡大

２－２　リーダー層の意図的な育成
・本気のＰＢＬ（継続・改良）　・生徒発のプロジェクト拡大

２－３　教員の理解拡大
・コア探究の取り組み共有の場作り　・教科の取り組みとの連携　・１－３の取り組み

３，評価や効果（成果）測定

３－１　コア探究の成果検証
・学びみらいＰＡＳＳ＿現状の確認（2019 年度中）→前年度と比較（2020 年度 3 月）
・課題研究を評価するルーブリック定着（高３）
・大学生によるアセスメント→評価指標の改良や取り組みの拡大発展

４，その他

４－１　発信＿社会的インパクト
・総合学会やキャリア学会への参加や発信。　公開研究会の開催
・成果や取り組み内容の見える化（論文にでき学外でプレゼンできるレベルに）

４－２　カリキュラムマネジメント（点検，カリキュラムマップ）（～次年度へ）
・特活や各教科と総合のリンク，キャリアパスポート含む

４－３　先進事例蓄積など教員のＩＮＰＵＴ（視察，勉強会参加などこれまで通り）
★重点的に検証する仮説：仮説 B→学校の核としてのコア探究，教員集団の変容，
仮説 D→生徒の変容(資質能力向上)

(3)　今年度の取り組み（3か月近く経過して）
①各学年コア探究のブラッシュアップ
高１：確実に次世代へ（これは高２も）。
三井先生が主担当として，探究・CSLをやってくれている。
高２：課題設定に特化したカリキュラム（論文，進路探究，チョコプロ→来年度テーマ決定）
体育科の吉留先生・国語科の松崎先生が中心となって回してくれている。
教材を作ってくれている。
高３：プロジェクトや起業プランを選べるように変更→すでに以下のような成果。
経産省の起業家教育実施校として支援を受けながら進められることが決定（学園の取り組みともリンク）
すでに動き出したプロジェクト多数あり。中高接続にもなりそう！
立宇治らしい学び＝論文だけでは不十分。
今年度はプロジェクト・企業，もしくは論文のどちらかを１つを選ぶように変更。
高３IGコース約270人の中から，プロジェクトと企業を選んだのは８０名。
・中高接続，高大接続などで新たな動き
・今年度の教員の変化や成長（？）
（ここまでの知見：不安に寄り添う大切さ，カリマネに気づく，教科とつなごうとする，教科観や授業観の変容）
→Ｋ先生（ベテラン・主任）：教科とのこと，Ｎ先生（主任）：部活とのリンク，Ｆ先生（非常勤）：授業の変容
Ｙ先生やM先生（若手・卒業生）：実は取り組みたかった！，Ｙ先生（若手）：他校との協働

昨年度の高１学年主任・Ｉ先生とM先生が主に去年の高１を回してくれていた。
現高３学年主任のＮ先生は部活でもコアを取り入れようとしていた。
体育科のＹ先生は以前からキャリア教育に興味があった。
Ｙ先生は，仙台三高（S先生）と国語科の先生との協働を進めているところ。

質問
・K先生より　コアやキャリアに対してどこにエネルギーを向けたいのか。
M先生は「学校の学びが社会につながっていない」ことを問題点に挙げ，それをつなげたいという思いから今に至る。
Ｙ先生はサンガユースとして立命館宇治・立大を卒業した。在学中から高大連携の在り方に疑問を持ち，もっと大学附属の強みを生かしてチャンスを形にしていきたいと思い，今に至る。
・K先生より
①先生方の努力がすばらしい。
コロナ禍で「本質的な教育とは何か」ということに対してベストを作れるのはすばらしい。高校生の時点で将来の見通しと行動することがわかっているのはすばらしい。
どういう取り組みがこの結果を生み出したのかは考察して，世の中に堂々と発信していってほしい。WWLの途中経過に，より一層力を入れてほしい
②教育の今後の歴史的転換
国力を高めるための教育をすることによって，国が豊かになると考えられてきた。
人的資本としての教育は，社会で活躍するためのもの。しかし，ここにとどまってしまうのはもったいない。
社会とつながるということは，社会との競争を勝ち抜くのではない。もう一段上の何かがあるのかと思う（第三の教育）
社会で活躍することだけ，自分さえよければいいということを考えるのではなく，「私が幸せに

なる。みんなも幸せになる」というビジョンが WWL の動きで見えてきたらいいと思う。
次の教育実践を世の中に発信してほしい。

・O 先生より
どこかに属しているうちは学校の殻を破れない子どもたちが何に価値を置いているのかが大事。
（コア）人間が「何をもって生まれてきているのか」を研究すると，学校や社会の新しい価値につながる？
・Y さんより
WWL の最後として今年度の取り組み＝カリキュラム開発
現時点で，具体があまりよくわからない。
中高一貫で何が変わるのか，どうやって変えていくのか。
→（S 先生より）
コア探究はカリキュラム開発。２０１８年の新カリキュラムが一回りした。これからどうするのかを Y 先生がまとめていく。
コア探究だけを見ると定着が大事。
高３の学びの集大成をどうするのかをきちんとまとめていくのが大事。
学校の方向性についてはこれから議論していくところ。まだ提示できていない。
・M 先生より（教育学）
教育ってなんのためにするのか。
社会から要求されているから教育するのではなく，社会を作っていく人たちを育てていくのがこれから必要になってくる。
知り合いの娘さんが立命館宇治の IM コースを卒業し，横浜国立大学・アフリカ・JICA に就職が決まった。おそらく今 M2。
立命館の目指す道として，高校でやってきたことが将来につながっていることがよく分かった。
・とりあえず実践をまとめ中

３，研究協議（全員）70 分
～今後に向けて(カリマネ，学校づくり，教員の育成などの観点から)～
（１）今年度以降取り組むべきことは？（以下は私見）
・探究を含むカリキュラムのふりかえり→ブラッシュアップを！　**カリマネ・コアとは何かの見える化**　コアって何？をはっきりさせたい。
・中高接続，コースを越えた教育づくり，教員の成長（授業が変わる）など**学校としての土台強化**が必須。
・評価についての取り組み，学校間連携など→**特に評価について大学との連携事業を進めたい**
・K 先生より
「コアでここまでいったよね」を作り，変化させ，新しいものを生み出し，形にすることが大事だと思う。整理していくことが大事。変化していく（論文だけ→論文・プロジェクト・企業から選ぶ）のバリエーションを増やすのはいいと思う。
その中で，論文・プロジェクト・企業が相互交流・相互評価をするのが大事。話せる場所を作り，生徒同士が研鑽できる場を設けたほうがいい。
いろいろとクロスした発表ができるといい？
高１のコアで教員が「なぜ学ぶのか」で自身の話をするため，この機会は生徒も教員も成長できる？最後の発表は進路とつなげるのがいい。「なぜ学ぶのか」「なぜ勉強したいのか」「将来何になりたいのか」を発表できる場があるといい。発表はいろいろな人たち（外部の人・他校の人など）が入り混じって聞くのも大事だと思う。
・溝口さんより
ベテランからコアを知らない人・若手の教員へコアを継承していく。

その際の継承にはいろいろな方法がある？コア探究の DNA・方法論を分けて考えるのが大事？教材を作ったとしてもその時々に使う教員によってやり方・教材・スケジュールが変わる可能性がある。←これが醍醐味。
しかし，その中で変わっていってはいけないものもある。
これらを整理しながら進めていくと，WWL の１つの成果物を発信することができる？
それぞれの先生方が意識して過ごせると活かせると思う。
・T 先生より
矛盾していることをやらなければならない。文科省は WWL でしたことをカリキュラム化してほしい，教科書を作ってほしいと思っている。しかし，それをするとコア探究の醍醐味がなくなってしまう。守るべきところと，そのときの工夫の両面が大事
蓄積をどう発信していくかが大事。コアの部分を教科書にするなど，まとめをするのが大事。
工夫してきたことを後の人が見て，振り返ることができるようにするのが大事だと思う。
・K さんより
カリキュラムの質が高まりつつある→成果が安定する→学校文化になる→同質性
しかし懸念点として「大学付属だからいいね」「恵まれているね」と言われる可能性がある。
世の中に対する貢献というよりは立命館の可能性を高める。
自分たちと異なる外部のつながりを続けていくことが大事。（WWL が終わったあとも）
中高生にとっての息苦しさは自分の通っている学校が自分の世界の８割だと思っている人が多い。そのため，学校以外の友達ができることが生徒にとっての救いになる。WWL が終わっても自分の学校以外にも友達が作れる仕組みを続けていってほしい。岡山大学の学長補佐がやっている SDGｓのプロジェクトは，近隣の６校を結んで話し合っている。そこでは知識に差がつかないテーマ設定をして，身近なテーマから話し合うのが大事。WWL で培ったネットワークを持続してほしい。持続可能なものにしてほしい。
・Y さんより
この３年間にやってきた価値を言語化されているだろうが，学校全体の文化にしていくことが必要不可欠だと思う。
教員にとっても，生徒にとっても改めて「コアって何」を振り返ってほしい。
コアでやってきたことがどうやって大学の学びにつながっているのかがもう少し見えてくるといい？
各学年で取り組んでいることを循環していく仕組みがほしい。
枠組みをつくるのも楽しいが，自己決定する仕組みを・合意形成する仕組みを増やすと，生徒の活動が豊かになる。
・M さん
①大学に入ってどうなのかを知る機会がほしい。
一回りした生徒に大学生になってからコアってどうなのかを聞いてアンケートとるのもいいと思う。
②論文・プロジェクト・企業をする。
マイラーニングストーリーにコアで何を学んだのかをメインで書くのはどうか？
何に苦労して，何を得たのか，どんな部分が成長したのか，今後どうしたいのかの形に変えるのはどう？
③教員がどう変わったのかが大きい。
全員にいきわたることの難しさや，温度差をどう埋めていくのかが課題として挙げられる。
コア探究・WWL の中で教員がどういうラーニングストーリーを描けるのかを書いて，語り合う。
「学びの木」はどう？将来教員としてどうなりたいか？今はどうなのか？
コアを通して「自分が何を学んできたのか」「どういう葛藤があったのか」をリフレクションする機会があるといい。

リフレクションはお手伝いできる。
教員自身も考えてから，生徒に教えるとお互いに成長できる。
・Y さん
振り返り自身が教員としてのキャリア開発につながると思った。
・U 先生
自分自身が社会を作っていく意識が大事だと思う。自分たちが住みたい社会，将来どんな社会を作りたいのかを考える仕組みを作りたいと思っている。
FORCUS といったプロジェクトをはじめ，生徒がいきいきと変わっていく様子が見られた。学校の中だけであまり活躍していなかった生徒が活躍するようになった。そういう取り組みを持続的にできるようにしたい。M 先生が放課後のクラブ活動のような形で全国の高校生と取り組みをやっていこうとしている。
プロジェクトのような形で日程を決めて，講演を聞いてディスカッションをするフラッグという取り組みを始めた。
生徒に話せる場所を提供してあげたい。
・O 先生
探究活動を作り上げてきた先生が楽しんでやっていたように思う。
教員の姿を見て学んでいる生徒が多いと思う。
リフレクションが一番大事だと思う。仕事でないところですることに価値がある。
カリキュラムが一回できると，それに従わないといけないと思ってしまう。(ルールに支配されてしまう？)「以前はこうだったのに，前はこうだったのに」となってしまうと，よくない取り組みに変わってしまう。
支配されないような次の段階が大事。湧き出てくるものでないといけない。
・Y 先生
最初は S 先生・T 先生の２人でスタートしたが，そこからたくさんの教員が関わるようになってきた。生徒も教員も，学校の体制も変わりつつある。その一方で，今までの総括ができていないことを痛感している。これからどう進めていくのかを考えていかなければならないと思っている。事業の半分の期間がコロナによって振り回されてしまった。生徒たちには他流試合をしてほしいが，教員もいろいろなつながりを持つ機会を増やしていきたい。評価はこれから考えていかなければならないところである。教員のラーニングストーリーをやってみたいと思うが，働き方改革が…公私混同ができる環境を望んでいる。
・K 先生
RIMIX のアドバイザーでもある K 先生から，「企業をしている教員」という新しい形の教員もありかなと思った。
・T 先生
リフレクションについて，リクルートで評価について勉強させてもらった。
「教員評価」というと反感を持たれるが，システムとして振り返りをする機会を持つのが大事。(マイラーニングストーリー)
附属校で交流するのもおもしろいと思う。
「仕事」となると考えが変わるが，「仕事の一環」としてやってもおもしろいと思う。本来は研修センターもその位置づけにしたかった…
「やってみたらよかった！」から広がっていく？
（２）その他
・来年度～面白いアイデアあれば
・いろいろ個別相談させていただきます。

４，諸連絡，今後の予定確認
（今後の予定）今年度ＷＷＬ最終年度

２回目）１１月１２日（金）（？）対面で公開研究会を兼ねる形ならよいが,,,（情勢見て決定）
高３公開研究会（マイラーニングストーリー）
３回目）１月２２日（土）学習発表会と同時開催。最後でもあり対面で実施したいですが,,,（情勢見て決定）
学習発表会＋運営指導委員会（最後の運営指導委員会になる予定）

2021 年度　第３回 WWL 運営指導委員会議事録（カリキュラム）

日程：1 月 21 日（土）14 時～15 時 30 分
参加者：11 名
運営指導委員：村井・山下・小村（★）・大森・溝口（★）・河井
学内（学園内）：越智・八木・酒井・西田・小笹（一貫教育部）

１，マイプロジェクトアワード@京都の見学
２，S 先生（＋N 先生）から報告
（１）この間の報告
・コロナで 12 月に文化祭＋体育祭という日程。この間受賞などもいくつか。
＊田中・福田→日本一！（TV 東京）
＊宮下グループ→金融公庫のビジコン全国ベスト 100
＊マイプロ京都に 9 チーム進出
＊Japan　Gate　Challenge　2 次進出 2 チーム　→1 チームがファイナリスト
＊STEAM フェスタや仙台での学会（？）への参加もあり。
・マイラーニングストーリーや報告書などを見ていると，プロジェクトや起業プランなどで学校外の場を体験した生徒の学びが濃くなる傾向あり（当然ですが）。（仙台三との国語科コラボでも似たような示唆あり）
・学びみらい PASS の速報が来たところ（昨年度より少し良くなっている。コアや新カリの成果が一定明らかに）。（実は大学 1 回生についてもいい情報が来ている（例：法学部や薬学部の GPA，総長ピッチなど））（高大接続の可能性）

（２）4 年間を終えるにあたって
・日本の教育が変わろうとする時期（新指導要領の公示→実施直前の期間）。キャリア教育の手引きでも教育の進化を感じる。
・4 年間ふりかえるといろいろあった
（生徒の記述，卒業生のその後，今年の学びみらい PASS，受賞などなど（来週まとめの授業））
（豪華な公開研究会できた）
・この間の主な取り組み
①カリキュラム開発：モデル作り（というより大事な要素明確化？）
→探究スキルを育てるの際に大人が本気で取り組んだ生の教材がいい。課題設定も練習なのでいろんなアプローチから。
論文・プロジェクト・起業プランなど表現の仕方は様々だが大事なことは同じ。教員のチームを作る探究にする。

②取り組み:他校や大学との連携。マイプロジェクトアワードなど(プロジェクト１～2→30)。コンテストなど他流試合。
→多くの生徒が自ら学校を出て社会と関わるようになる（数値化ができてない,,,）
③評価や効果（成果）測定：あまり進んでいない。ただ一貫教育部の調査からも学び充実＋マイテーマを持っているとわかる。
（課題研究充実度 87%（cf：72%），課題研究と進路 46%（cf：46%），進学後もテーマ深めたい 67%（cf：42%））
→評価に関する高大連携など，ここでも縦につなぐ大切さが示唆
④その他：生徒の資質・向上については学びみらい PASS などで仮説ができてきた。次は教員の成長の仮説作り？
キャリアパスポートの元となる取り組みは実施できている（口頭試問，マイラーニングストーリー）

＜最も重要な成果や知見（５つに絞るなら）＞

①カリマネはストーリー作りかもしれない。そのときコア探究は核になれる。コアとは学びのストーリーのコア？
②起業プラン・論文・プロジェクトに共通するものがある。
→高校の学びの集大成となれる→生徒がテーマを持っていることで社会とつながっていける
③総合は思考判断表現が育つ。だからキャリア教育が土台。実際に学びみらい PASS やキャリア意識調査がその裏付け。
④担当教員の成長はあったが，学校としての意識にはなってない。でもそこをできた学校がこれから強いだろうな,,,
→実は教員の学びや成長の個別最適化必要？教員の成長を意図した取り組みにする重要性
⑤（一般受験をしない生徒）高校 3 年生後半期の過ごし方モデルの一つになる。

＜課題＞　（個人的な課題も組織としての課題もいっぱいありすぎますが,,,）

・そもそもこれだけ学校外のコンテンツが充実している時代に，いろんなイベントを学校で取り組む意義は？
逆に学校でやるべきことは何で，生徒が外とつながりやすくなる仕掛けは？
・これからの組織とは？（自然と取り組みが共有でき，縦にも横にもつながるにはどうしたらいい？）
→人員を増やそう，研修を重ねて取り組みを伝えようという発想を捨てたほうがいいのかもしれない
・生徒のプロジェクトなども教員のかかわりも，全員必須の最低ラインは極めて低くして，やりたい人が自由にできる形が実はいいのではないか？しかしそのような考え方こそ学校では難しいかもしれない。
・現実的にはこのような授業をまわしていく教員の育成などは大きな課題（学校内外でのつながり重要)。

（３）次年度に向けて

・WWL を締めくくること（報告書作成，今のうちにする情報収集や予算執行など)。
・次の一歩を構築（組織として／酒井個人として）：新学習指導要領の内実化と実践は忘れてはいけないだろう。
→ポスト WWL 事業？三菱未来財団？（外部資金は視野に入れる）（コアの芽や可能性がポスト WWL 事業の根拠に？）
・コアの芽や可能性：マイテーマを深めて社会とつながる個別最適な学校を越えた学び，出会いと原体験。

（４）N 先生から（3 年間学年主任）

・生徒はコアの意味を感じてくれている。
・教員として，どことどうつなぐのかなど伴走することが大切だと実感。生徒は動き出すと自

走する。もちろんトラブルなども
あるが，そっと大人が寄り添うというスタンスが大切。
・昔は高校ではクラブや勉強だけしてればよかった。今はそうでもない。そこで社会とつながる探究が重要なのだろう。
生徒を見て教員が変わってきたことも感じている。

３，委員の先生方から

K：マイプロジェクト，マイテーマということが重要。卒業生対象に卒業後のマイプロアワード実施などもありかも。
委員会を学生に仕事として運営させるのもありかもしれない。学内の取り組み水準を上げるとしたら，生徒に数値化させるというアクションをさせてもいいかもしれない。生徒同士のコラボは面白い。

O：教員が学校の外に出ていくべきなのだろう。みんながネットワークを持てれば。

Mu：きっかけで人が変わる。一歩踏み出すのが大事。宇治を見ていて徐々に組織ができてきているのも感じている。

Mi：昨日や今日の発表が今後もつながっていくのだろうし，そうあってほしいと感じた。

Om：他の中学校に企業の教材など紹介すると，反対が多かったり，外のプログラムに乗っかればいいのだろうという雰囲気を感じることが多い。それでいいのだろうかと思う。ミドルリーダーの育成が重要。生徒の変化を見せるのは教員には重要。

Y：学び（キャリアと教科）・自己（過去の自分と未来）・人間関係（学校内外含む）をつないだのがコアだったのだろう。やりたいことは育てていくということが重要。今思うと CSL からそこは重視しいてたのだろうなあ。

K：学校でやるべきことは何で，生徒が外とつながりやすくなる仕掛けは何か？これこそ宇治でまとめるべきことだろう。
経産省とのプロジェクトで委員をしている広尾学園の木村先生に伝えたらいいのではないか。改めて日本はマインドセットを大事にしようとする方向があると思う。コアを通じてどんな変化があったのかもこれから明らかにしていくことだろう。

４，最後に本校教員から

Ya：IG は自分のやりたいことを追求しているということを感じたというコメントがもう一つの会議であった。　CSL のときから大事にしたことが，3 年間の形になってきたようにも思う。

越智：改めてみなさんとの出会いが宇治にとっての財産だと感じた。探究は竜巻？巻き込まれつつ学校としても次の動きを考えていきたい

ネットワーク部会　運営指導委員会　議事録

2021年度 WWL 運営指導委員会

1月22日（土）13時30分～

＜参加者（敬称略）＞

＊運営指導委員 飯吉 透，浮田恭子，神居文彰，二宮皓，川上隆史(全龍)，小関道幸

＊検証委員　影戸誠，花田真吾　　＊学内（学園内）越智，八木，上杉，小笹，

海外交流アドバイザー　竹中宏文

１．委員メンバーから近況や昨日，本日の感想をお願いします。

○　文科大臣賞等の成果，おめでとうございます。

○　管理機関と拠点校を中心に，連携校，連携団体が相互に影響を与え合う取り組みとなった。

○　ものが言える高校生が育っていると感じた。

○　最終成果としての位置付けで，生徒が計画から運営まですべて行う Global Youth Fair SURVIVE は，とても興味深いものである。ぜひどのような議論になったか共有してほしい。

○　発表テーマについて，IG の生徒は個人的な興味が中心，IM は社会的な課題が中心という傾向を興味深く思った。IM 生徒が SDGs の社会課題について真剣に取り組んでいる姿は素晴らしいが，全員そうなるのではなく，もう少しいろいろあってもよいのではないか。とはいえ，アクティブに，今の問題をどちらも取り入れている。

○　探究については，欧米に学ぶのではなく，もっと日本的な見方や日本独自のものを出せないのだろうか。むしろ，欧米のほうからは日本に学ぶ動きもある。日本の現状は，未だに世界（欧米）で良いとされた物を取り込むのみのグローバル化で終わっているように思う。この国の良さとは何なのだろうか，周りから言われたのではなく，自ら気付き，発信していける次世代をこれからも立命館宇治で育ててほしいし，その考え方を広げてほしい。

○　コロナ禍において，むしろ SNS や Web ツールの使い方を体得し，自ら動き出している生徒が出ていることを評価。

○　共通テストにおける東大での傷害事件のような痛ましい事件があった。将来を見通して頑張ってきた生徒が挫折した場合，どのような救いがあるのか。失敗とやり直しへの許容，柔軟性も意識して伝える必要がある。

○　今後何を，どのように積み重ねていけるのか，注目していきたい。

２．今年度取り組み報告

① 全国高校生フォーラム　文部科学大臣賞受賞

連携校も　審査委員長賞・生徒投票賞

② 海外研修・講演会等をオンラインで

ラオス１回　フィリピン１回

Flag

SR サミット連続講演会

③ 国際会議や MUN をオンラインで

日本福祉大学および立命館主催　WYM

立命館高校主催　RSGF

本校主催　SR サミット FOCUS

Global Youth Fair 本年単独開催２月　別紙

生徒の計画・実行委員会

台湾・マレーシア・フィリピン・シンガポール・カンボジア

③ コア探究・文科探究・SDGs 等のカリキュラム開発

④ 生徒の活躍ビデオ作製

新入生の目標・文科の指標を入れて評価の基準にできるように

４．教員アンケート　報告（第６章１で紹介しているためここでは省略）

2022 年１月に教員向けアンケートを実施。

高校教員の約６割，高校担任の約６割が回答。

おおむね生徒への好影響は理解されている。

探究学習や国際化についての必要性も同様に理解されている。

生徒の変容を知る機会が少ないとの記述が多い。

教員への広がりについては，プロジェクトや探究系授業などにかかわる教員は広がったと感じているが，そうでない教員には実感が薄い傾向。コロナ禍で海外の来校がなかったことも要因か

○　教員が研修などで，生徒の成長を共有するのはとても大事。生徒同士がクラスメイトの活躍を知ることも必要。そのような取り組みを定期的にやるのが良い

○　データより，教員への広がりは，これで十分だと思う。これ以上広げることにエネルギーを割くよりも，生徒の指導にエネルギーを割いた方が良い。時間はかかるが，それが広げるための方法でもある。

５．次年度について

○　イノベーティブに攻めの姿勢を忘れずにやってください。